

神の聖なる戒め

モーセの十戒

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著



1 それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。

2 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。

3 あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。

4 あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造つてはならない。

5 それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、

6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

7 あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。

8 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。

9 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。

10 しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。

―あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。―

11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしおられる地で、あなたの齢が長くなるためである。

13殺してはならない。

14姦淫してはならない。

15盗んではならない。

16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。

17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

（出エジプト 20・1～17）



正義は国を高め、罪は国民をはずかしめる。

(箴言 14・34)

目次

モーセの十戒

神の聖なる戒め

はじめに

1章 神のみこころの現われ —モーセの十戒—

17

2章 人間にとっての律法の意味 29

1 律法は、罪の自覚をひき起こします

2 律法は、罪が神に対する債務であることを明らかにします

3 律法は、人間のうちにある罪を明らかにします

4 律法は、罪人を訴えます

5 律法は、恵みに導きます

3章 信者に対する律法の意味 49

1 神の賜物として与えられる義

2 神の戒めを喜ぶキリスト者

3 十戒を守ろうとするキリスト者の敗北

4 御霊の実としてのみこころの実行

4章 第一の戒め 「ほかの神々があつてはならない」 83

5章 第二の戒め 「偶像を造つてはならない」 93

6章 第三の戒め 「主の御名を、みだりに唱えてはならない」 101

7章 第四の戒め 「安息日を聖なる日とせよ。

仕事をしてはならない」 113

8章 第五の戒め 「あなたの父と母を敬え」 127

9章 第六の戒め 「殺してはならない」 141

10章 第七の戒め 「姦淫してはならない」 157

11章 第八の戒め 「盗んではならない」 171

12章 第九の戒め 「偽りの証言をしてはならない」 185

13章 第十の戒め 「隣人のものを欲しがってはならない」

はじめに

ゴットホルド・ベック

イエスは答えて言われた。「モーセはあなたがたに、何と命じていますか。」

(マルコ 10・3)

今から約二千年前、イエス様はこのように語られました。イエス様は、「聖書こそが神の言葉そのものである」ことを、厳然として示されたのです。

聖書は、いつの時代にも「神の言葉そのもの」です。しかし、世界の多くの人々は、その神の言葉を聞こうとしないで現代に至っています。

モーセは旧約聖書の出エジプト記20章で、主である神の「十の戒め」を伝えました。ところがこの神の戒めは、今日の世界では大切にされていません。政治家たちは、次々に新しい法律や組織を作りますが、そこに出現したのは、神の基準に従った秩序ある世界ではなく、人間が考えた戒めを曲げ、相手の勝手な言い分を認め、表面で「仲良く」していくことが平和に繋がると考えたのです。その結果がどうなっているかは、ご承知のとおりです。聖書は次のように言っています。

正義は国を高め、罪は国民をはずかしめる。

(箴言 14・34)

「あれもこれも認めよう。人間が生きていく基準に正邪の区別などはない。人類全て仲良くしよう」という考えからは、なんら確固とした良いものは出てきません。それどころか、往々にして、人々を恐ろしい不幸に投げ込む悪魔的な結果がもたらされます。

その一例として、ドイツの例を見ましましょう。ドイツでは一九五〇年の法律で、「聖書の神や教会を侮辱した者」は三年間刑務所に入れられ、「姦淫をした者」は半年間刑務所に入れられました。「淫らな雑誌を出版する者、同性愛の者」も同様です。また、「子供を墮す者」は絶対に許されていませんでした。その女性も、それを手伝った医者も、刑務所に入れられました。「聖日を冒瀆した者」も刑務所入りか罰金刑でした。

ところが二〇〇〇年の法律は、一九五〇年の法律とはまったく違う、聖書を無視したものになったのです。そして、恐ろしい混乱と退廃が人々の生活を支配しています。人類が拠って立つべき神聖な基準は、悪しき自由の名のもとに有名無実となっています。これが、人間が神の言葉を無視した結果です。

今、世界中の人々が、基本に立ち返って、読み、かつ拠って立つべきものは、神の言葉である聖書のみことばであり、とりわけ、主である神がモーセを通して人類に与えられた「モーセの十戒」です。キリスト集会の雑誌「主は、生きておられる」に連載した「モーセの十戒」のメッセージを、改めて冊子にした理由もここににあります。

なぜ、神のみことばが人類に与えられたか。

神のみことばである聖書が人類に与えられた目的とその意味は何でしょうか。それについてイエス様ご自身が、次のように明言しておられます。

「わたし（イエス様）がこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。」（ヨハネ 15・11）

「人々のうちに喜びが満たされるため」。これこそが、主である神が、人類にみことばを与えられた目的です。聖書のみことばこそが、人間が喜んで生きていくために最も大切なものです。それにくらべると、人間が語った言葉など、まったく取るに足りません。大切なのは、主なる神の言葉です。満たされた人生、祝福された生活の秘訣は、神のみことばに頼ることです。主イエス様は言われます。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」（ヨハネ 14・6）

「真理によって彼らを聖め別つてください。あなたのみことばは真理です。」

（ヨハネ 17・17）

また、聖書は次のように言っています。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。

(ヨハネ 1・1)

(ヨハネ 1・14)

その名は、「神のことば」と呼ばれた。

(黙示 19・13)

主イエス様を信じること、聖書のみことばに頼ることの大切さを、主イエス様は「山上の垂訓」の中で語っておられます。

「わたし(イエス様)のこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。」

(マタイ 7・24)

また、次のようにも語られています。「」の中は、イエス様ご自身のみことばです。

だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。

(1コリント 3・11)

「この天地は滅び去ります。しかし、わたし(イエス様)のことばは決して滅びることがありません。」

(マタイ 24・35)

イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。（ヘブル 13・8）

「もしあなたがたが、わたし（イエス様）のことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」（ヨハネ 8・31、32）

次に、世界の指導的な役割を果たした人々の、聖書についての発言を見てみましょう。

「聖書は古いものでもなければ、新しいものでもない。聖書は、永遠なるものだ。」

（ドイツの宗教改革者ルター）

「いかなる世界の歴史に見るよりも、聖書の中には、より確かな真理が存在する。」

（イギリスの物理学者ニュートン）

「私が獄に繋がれ、ただ一冊の本を持ち込むことを許されるなら、私は聖書を選ぶ。」

（ドイツの詩人ゲーテ）

「聖書は単なる書物ではない。それに反対する全ての者を征服する力を持つ生き物である。」
（フランスの皇帝ナポレオン）

「私の生涯に最も深い影響を与えた書物は、聖書である。」

(インドの指導者ガンジー)

「聖書は、神が人間に賜った、最もすばらしい贈り物である。人間の幸福にとって望ましいものは、すべて聖書の中に秘められている。」

(アメリカの大統領リンカーン)

「あなた(主)のみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」

(詩篇 119・105)

「私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。」

(詩篇 119・162)

(イスラエルの王ダビデ)

私たちは、人生の真の目的と意味、人生の希望と喜び、心の拠り所、平安を持つ必要があります。そしてこれらは、ただ、聖書を通してのみ与えられます。

人々は、神のみことばである聖書を通して神と出会い、集会に導かれ、生き生きとした喜び、永遠のいのち、人生の希望を持つようになります。聖書こそが、唯一無二の、「祝福された人生の土台」です。主である神の前に次の態度をとる人々は、主に祝福されます。

「私たちの考えや、思いや、感じていることは、大切ではありません。神のみことばである聖

書が何と言っているか、それこそが大切です。私たちが聖書を判断するのではなく、聖書が私たちを判断すべきです。」

聖書はまた、宗教や哲学とは関係のないものです。なぜなら、聖書は、「人間が作ったもの」ではないからです。「主である神が語られた啓示そのもの」だからです。主なる神が語られた神の啓示。それは、いと高き所から人類に与えられたものです。

かつてイエス様を迫害したパウロは、後に次のように言いました。

私はそれを人間からは受けなかつたし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

(ガラテヤ 1・12)

イエス様は次のように言われました。

「わたし(イエス様)が道であり、真理であり、いのちなのです。」(ヨハネ 14・6)

ちつぽけな人間である私たちが、聖書に書かれていることを理解できるか、できないかは問題ではありません。聖書に書かれている事実は、厳然として「事実」だからです。あなたが信じるか信じないか、認めるか認めないかは、まったく問題ではありません。聖書の真理は、人間の思いをはるかに越えて、主である神が語られた真理だからです。

人生の喜びの源は、神のみことば、また神の約束にあります。つまり、神のみことばは、私たちにとって人生最大の宝物であり、神からの贈り物であり、真理そのものだからです。神のみこ

とばは、ダビデが言ったとおり、「私たちの足のともしびであり、私たちの道の光」です。ペテロは、「神から与えられたみことばこそが、私たちが救われるために与えられた、比べられないほど貴い神からの贈り物である」ことを、次のように言い表しました。

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。
(1ペテロ 1・23)

私たちは、天地創造の神のみことばを安心して信じることができます。なぜなら、語られたお方が、嘘を知らないお方だからです。ご自身のお約束を、必ず守るお方の言葉だからです。神のみことばに聞き入る耳を持てば、主はあなたを喜び、あなたに語りかけ、必ず祝福してください。そしてあなたは、神が導き、引き上げてくださるすばらしい救いの世界に生きる幸せと喜びに満たされ、その喜びをまわりの人々に語らずにいられなくなるでしょう。イエス様は、そのようなあなたを心から喜ばれて、多くの人々の救いのために用いてくださるでしょう。

どうかあなたも、聖書のみことばを通して神の愛を受け入れ、救われ、真に意味のある人生、主にある平安、尽きない喜びの泉を見出し、幸せになってください。



1章

神のみこころの現われ

—モ—セ—の十戒—

はじめに、これから学んでいく「神の聖なる戒め」、モーセの十戒が記されている聖書の出エジプト記、20章の1節から17節までをこいつしよに読んでみましょう。

¹ それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。

² 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。

³ あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。

⁴ あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造つてはならない。⁵ それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、⁶ わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

⁷ あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。

⁸ 安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。⁹ 六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。¹⁰ しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。―あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。―¹¹ それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからであ

る。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。

12 あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齡が長くなるためである。

13 殺してはならない。

14 姦淫してはならない。

15 盗んではならない。

16 あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。

17 あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

(出エジプト 20・1～17)

神の聖なる戒めである「モーセの十戒」は、現代に生きる私たちにとつてどのような意味を持っているのでしょうか。結論を先に言いますと、「モーセの十戒」は、「聖なる神のみこころの現われ」と言うことができます。

神のみことばである聖書は、終始一貫して一つのことを強調しています。それは、個人の生活、またさまざまな国民の生活のあらゆるできごとの背後に、「聖なる神のみこころが存在する」ということです。すべてのできごとは、その初めから終わりまで、聖なる神のみこころの完全な成就にほかなりません。

多くの人間は、「すべては聖なる神のみこころの成就である」ということを認めてはいるのですが、認めながらも心のどこかで残念だったり、あきらめたり、ため息をついたりしてしまいます。というのは、「神のみこころとは、私たち人間の利益とは反対のものであり、私たちを束縛するものだ」と感じてしまうからです。神のみこころによって、私たちの生き方が制限され、束縛され、損なわれると感じる人々が非常に多いのです。

しかし実際は、神のみこころは、その正反対です。神のみこころは、「まことのいのち、まことと幸せの必要条件」です。ちょうど自然にとつて太陽が不可欠のように、人間にとつて神のみこころは必要不可欠です。私たちは神のみこころによって、まことのいのちを与えられ、今なお守られているのであつて、それは神の永遠のご計画に基いてなされていることなのです。私たちの人生にとつて、神のみこころは、栄光に満ちた目標です。神のみこころは、私たちがあらゆる危険と戦いを乗り越えていくための唯一の力です。そして神のみこころは、必ず成就されます。

ですから神のみこころは、私たちの人生を損なうものでは決してありません。むしろ反対に、神のみこころに逆らうことによつて、私たちは自分の人生をめちゃくちゃにしてしまうのです。自己支配は必ず自己破壊を招きます。人間の自分勝手な意志、わがままこそが、私たちの人生を破壊するのです。

私たちの人生を通して、神のみこころが現わされるのなら、私たちの人生は完全に聖なるものだと言えましょう。主イエス様のこの地上における生涯がそうでした。神のみこころは主イエス様を通して現実に生きたものとなり、目に見えるものとなったのです。主イエス様の人生は聖な

るものであり、完全なものでした。

世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。すす。
(1ヨハネ 2・17)

ですから、すべて主を信じる者の願いは、「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」(マタイ 6・10)というみことばの通りとなるのです。

そして、このように真剣に祈り求めている人々は、神のみこころが具体的、現実的にどこにあるのか、何を意味しているのかを正しく知らなければなりません。

まず、神のみこころは、神が造られた大自然を通して明らかに示されています。無数の星々は、厳然として創造主の侵すことのできない法則に従って存在しています。すべての自然界は、そのすべてが神のみこころの下に置かれており、創造主が定められた通りに活動しています。こうした自然の法則の中から、神のみこころの永遠性を読み取ることができるのは、何とすばらしいことでしょうか。この天地が造られて以来、ただのひとつも、主が造られた自然界の法則が変えられたり、修正されたり、無力になつたりすることはありませんでした。

次に、多くの国々の歴史を通して、神の永遠の法則を読み取ることができます。なぜなら、世界の支配は神のみこころの現われだからです。多くの国々は、神のみこころに従って起つたり倒れたりします。なぜそうなるかは、箴言に示されています。

正義は国を高め、罪は国民をはずかしめる。
(箴言 14・34)

永遠の神のみこころを求める者は必ず祝福され、自分の利益だけを追う者は必ず滅び失せませす。

次に、もう一つの神の法則を見てみましょう。

あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。

(創世記 12・3)

このみことばは、アブラハムとその子孫、つまりイスラエルの民に与えられたものです。ユダヤ人を祝福する者は祝福され、ユダヤ人をのろう者はのろわれる、ということとは、世界史によって証明されています。神のみこころは、一人の例外もなく、すべての人間の心に刻み込まれています。ですからたとえ聖書を知らなくても、福音を一度も聞いたことがなくても、人間は神のみこころを正確に知っているのです。そのことは、異邦人について聖書に記されている箇所を見れば明らかです。

彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。

(ローマ 2・15)

すべての人間は、神の戒めを心の中に知っているのです。そして神のみこころを行なっている

かどうかの責任を問われているのです。

このようにして私たち人間は、神のみこころを、自然界の法則を通して、また良心を通して知ることができません。しかし、神のみこころをもっとも詳しく、完全な形で知ることができるのは、神が人間にくださったみことば、聖書を通してです。なぜなら、聖書は神のみこころの表われだからです。ですから、神のみこころを知りたいと思うなら、聖書を読んでください。聖書こそが神のみこころを啓示するものです。聖書の中には、「わたしは…しよう。」という神のみことばが多く出てきます。これによって私たちは、神のみこころが何であるかを知ることができません。

神のみこころを表わす、「わたしは…しよう。」というみことばは、いつも最高の権威を持っており、「神がなさることは必ずその通りになる」という絶対的な必然性を示しています。そして主なる神のみこころ、「わたしは…しよう。」というみことばは、私たち人間にとっても、「あなたはそのようにすべきである。」という絶対的な意味を持つものになります。

したがって、神によって造られたすべての被造物にとつて、神のみこころは命令を意味し、その命令は議論することの許されないものであって、その通り受け取って実行しなければならぬものなのです。神のみこころから離れて自分勝手な道を行くなら、人間は破滅に至ります。

神のみこころに対する従順は、常に祝福であり、神のみこころに対する反逆は、常にのろいです。

なぜ、多くの人々、多くの家庭、さらには多くの国々が破滅に至るのでしょうか。

世界史の問題を考えると、ある人物、その人の家庭や周囲の人間、また関係する国々が、神のみこころに対してどのような態度をとったのか、つまり従順な態度をとったのか、あるいは叛逆する態度をとったのかが、非常に重要な手がかりとなります。

そこで、主なる神は私たち人間に「何を望んでおられるか」が大きな問題になります。主のみこころは「モーセの十戒」の中に明確に示されています。「モーセの十戒」は、約三五〇年前、主なる神がイスラエルの民に対して、モーセを通してシナイ山でお与えになった「十の戒め」です。

主なる神は、一つの民を選ばれて、すべての民の模範となさいました。主なる神は、イスラエルの民を通してご自身のみこころを明らかにしようとなさいました。そして、主なる神の戒めを守る民は栄え、主なる神の戒めに逆らう民は滅びる、ということを示そうとなさいました。

イスラエルの歴史を見ると、イスラエルの民が神のみこころに従順であった時に栄え、神のみこころに従わなかった時に滅びたことがわかります。

主なる神は、イスラエルの民と一つの契約を結ばれました。

「あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。」

(出エジプト 19・5)

このことは、主なる神のみこころでした。主なる神は、やがて救い主を地上に遣わすことを定

められたイスラエルの民に対して、特別の目的を持っておられました。ですから主なる神は、イスラエルの民に対して道徳の模範だけでなく、「どのように神に近づけばよいか」ということをもお示しになったのです。

創世記から申命記までの五つの「記」には、イスラエルの民に対する戒め、つまり神のみこころが明らかに示されています。これらの戒めの多くのものは、イスラエルの民のために書かれたものですが、それらの核心となっているのは「モーセの十戒」と呼ばれる戒めです。このモーセの十戒は、イスラエルの民だけでなく、すべての人間に当てはまる神のみこころを表わしています。ですからモーセの十戒は、あらゆる時代のすべての人間に対する戒めであり、命令なのです。

主なる神は、モーセの十戒を人間にお与えになってから、これに代わる律法を与えられませんでした。主なる神は、いつでもどこでも当てはまるものとしてモーセの十戒をお与えになり、それを変えようとはなさらなかったのです。

主なる神のみこころは完全であり、したがって変更することができないものであり、また変更をする必要もないものです。神の基準は永遠です。

今から三五〇〇年前に、主なる神は「人間のあるべき姿」をお与えになりましたが、それは主のみこころそのものであり、今もなお有効です。

「まことの人間」とは、どのようなものかを知りたいと思うなら、モーセの十戒を読んでください。主なる神が人間に何を要求しておられるかを知りたいと思うなら、モーセの十戒を見てく

ださい。

ある人がイエス様のみもとに来て、「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」と尋ねた時、主イエス様は「戒めを守りなさい。」(マタイ 19・17)と答えられました。イエス様の答えは明快で論理的です。つまり、神の戒めを完全に守る者は神のみこころを行なう者であり、神の要求は満たされます。その結果、その人は神に義と認められ、永遠の救いにあずかります。

私たちが主なる神に従って何かをしたいと思うなら、その道ははっきりと示されています。「神の戒めを守れ」。このみことばに尽きるのです。

モーセは、律法による義を行なう人は、その義によって生きる、と書いています。

(ローマ 10・5)

しかし今まで、この地上で神の戒めを完全に守ることができた方は、ただひとり、イエス・キリストだけです。イエス様は、ご自身の行ないを通して義と認められた、ただひとりのお方です。イエス様だけが神の戒めの基準に完全に合格できた方でした。ですから主なる神は、イエス様に向かって「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」(マタイ 17・5)と言われたのです。

人間は誰一人、神の戒めを守ることができません。私たち人間のうちには、神の戒めに逆らう心、避けようとする心、罪を犯そうとする心があるからです。

多くの人々は、幸せは、あらゆる束縛や権威からの解放、そして神の制限からの解放にあると思っています。しかし、まさにその思いこそが罪の本質の現われなのです。つまり、私たち人間が追及する理想と、神の理想とは正反対なのです。

このような愚かな幻想に陥らずに、真実を求める人々は、「神のみこころにかなった歩みをする」ところこそがまことの幸せだと知っているゆえに、「神のみこころを實行したい」と願います。しかしこのような人々も、厳しい現実には直面すると、「人間が神のみこころを行なうことはできない」という事実を認めざるをえなくなります。

聖書によると、神の戒めを完全に守る者だけが、神の前に義とされるとあり、神の戒めに対して、ただの一度でも違反するならば、その人は債務のある者とされるとあります。

律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。
(ヤコブ 2・10)

この世においても、裁判所に引き出された罪人が、刑法のすべてを犯しているということは、まずありえません。ですが、たった一つの法律を犯しただけでも罪であることに変わりありません。まして、聖であり義である主なる神の前に立っている私たちの罪の状態は、何と深刻なことでしょう。私たちの中でいったい誰が、「自分は神の戒めを完全に守り、一つの戒めも破ったことがない」と言える人がいるでしょうか。

だとすると、私たちはモーセの十戒に対して初めから敗北者として立たざるをえないのでしょ

うか。私たちのような罪深い人間が、モーセの十戒について学ぶことは意味があるのでしょうか。主なる神のみこころを、神が人間にいくら告げ知らせても、結局誰一人みこころを行なえないなら、それは意味があることなのでしょう。多くの人はこのように考えて、「誰一人モーセの十戒を守ることができないのだから、十戒は無用なものである」と思うようになってしまいました。

このように、十戒は無用だと考えることにより、主なる神のみこころは、個人や国民の中で色あせてしまい、正しい生活の基準がわからなくなり、結局おかしなものが基準となってしまうのです。聖書はまた、その行きつくところも明らかに示しています。

それらは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。

(ローマ 1・25)

それではなぜ、聖なる神のみこころを知ることが必要なのでしょうか。その理由は、「罪深い人間が罪とは何であるかを知るため」であり、「自分自身の置かれている危険な状態を認識するため」であり、そして「救いを求めるようになるため」です。罪人である人間は、モーセの十戒によって罪とは何であるかを深く自覚することによってのみ、「主イエス様の十字架によって罪を赦され、主なる神の戒めに対し違反の無い者として認められる」という救いの恵みを受け入れるように整えられ、準備されていくのです。

2章

人間にとっての律法の意味

次に、「罪人である人間にとって神の戒めがどのような意味をもっているか」を学んでいきましよう。罪人である人間にとつての律法の意味は、五つに分けて考えることができます。

- 1 律法は、罪の自覚をひき起こします。
- 2 律法は、罪が神に対する債務であることを明らかにします。
- 3 律法は、人間のうちにある罪を明らかにします。
- 4 律法は、罪人を訴えます。
- 5 律法は、恵みに導きます。

1 律法は、罪の自覚をひき起こします。

私たちは、ものの長さを正しく知るために、「物差し」を必要とします。それと同じように、何が正しく、何が正しくないかを知るために、神の尺度である「律法」が必要なのです。現在、個人や家庭、さらに国民全体の生活に生じている大きな問題は、「人間が、何が正しく、何が正しくないか」を、もはや知ることができなくなっていることから生じています。みんながめいめい勝手に、「これは正しい、これは正しくない」ということを判断するようになってしまっているのです。万物の創造主である神ではなく、人間自身が万物の尺度、正義の尺度になっているのです。そして、「何が善で何が悪か」を自分で決める権利を主張する者は、他の人々にも当然のことながら同じ権利を認めなければなりません。

現代に生きる私たちは、一人一人が自分が考える「正義」を勝手に主張することに慣れてしまっています。そのことは、いろいろな実例が示しています。その結果は恐ろしいことになりました。たとえば戦争犯罪者は、彼が確信する「正義」の尺度で行動したのだから、道徳的には罪が無いと言わなければならなくなるでしょう。戦争中は正義の英雄だった人が、終戦とともに他国の「正義」によって死刑になるということは、歴史にはいくらでも見られる事実です。

私たちの自分勝手な良心などは、まことに不確実で、相対的で、頼りないものです。なんの確たる基準もなく、そのときに自分が正しいと思ったことに従って行動するだけです。本来人間が持っている罪の性質によって、何も見えず、何も聞こえなくなってしまうのです。

今や私たちの良心は、主なる神の前に、「何が正しく、何が正しくないか」を判断できなくなってしまうています。ただ自分自身の勝手な判断により、または周囲の人々や所属する集団の判断により、「正しい」とみなされることを「正しい」と決めるだけに過ぎなくなってしまうています。

ですから、シナイ山でモーセの十戒をお与えになった主なる神ご自身の啓示は、今日なんと必要なことでしょう。モーセの十戒を与えられた神こそ、「わたしが主である。わたしは：しよ。う。」と言うことのできる、唯一の神です。

今、世界のすべての人々が、どうしても知らなければならぬことは、主なる神の「絶対的な律法が存在する」ということ、そして永遠までも、「すべての人間の基準となる律法が存在する」ということです。

主なる神は、自ら人間のために語ってくださいました。主なる神は、石の板の上にご自身の指で十戒をお書きになりました。そしてその十戒を、モーセを通して全人類にお与えになりました。それゆえに私たちは、主なる神のみどころを知ることができ、何が正しく、何が正しくないかはつきりと知ることができるのです。この十戒は、どんな子供でもわかるような簡単なことばで、聖なる神のみどころを明らかに示しています。

ちょうど主なる神が私たちを見つめておられるように、私たちも自分自身のありのままの姿をよく見ることができるよう、主なる神が私たちの前に立ててくださった鏡、それこそがモーセの十戒です。

このモーセの十戒によって、何が罪であるかも明らかにあります。

なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。

(ローマ 3・20)

ギリシャ語の「罪を犯す」というもとの意味は、「的に当たらない」こと、「的を外れる」ことを意味します。聖なる神のみどころは、十戒という律法の形で私たちに与えられています。ですから、罪とは、この聖なる神のみどころを行なわないこと、的を外すことにほかなりません。

私たちはこの神のみどころの鏡に映った自分自身を、あえて見ようとするのでしょうか。ダビデはあえてそうしました。そして祈りました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください

い。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。
い。
(詩篇 139・23、24)

このように祈ることは、真理への誠実な意思を表わします。真理に対して心を開くことこそが大切です。しかし大部分の人間は、薄暗いところで生活することを好みます。彼らは光の中に来ることを恐れ、自分の人生の深いところを隠し、神の光が入ってこないように、それを隠してしまおうと必死になっています。人は恥をさらしたくないのです。その状態は、かつてイエス様が嘆かれた当時も今も、まったく同じです。

そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。
(ヨハネ 3・19、20)

暗闇の中にとどまろうとすることは、何と恐ろしいことでしょうか。遅かれ早かれ後悔する時が確実にやってきます。それが来た時には、すでに遅すぎるのです。

病人が医者¹の診断に耳を傾けようとせず、自分は健康だと思い込んで、死に直面することはまことに悲劇的なことですが、はるかに悲劇的なことは、暗闇の中にとどまり、主なる神の光の中に来ようとしないこと、そして罪を隠そうとすることです。なぜなら、その時には肉体的な死だけでなく、霊的な永遠の死という破局がやってくるからです。

神の光の中に来ようとする者が、モーセの十戒を真剣に読むとき、それらを守り通すことが不可能だと気付かされ、絶望に陥ります。なぜなら、私たちが正直な気持ちで、十戒の一つ一つの律法を読むたびに胸を打たれ、私たちは罪深く、主の前の的を外れていると告白せざるをえないからです。

2 律法は、罪が神に対する債務であることを明らかにします。

律法は、単なる教えではなく、生けるまことの神ご自身の啓示です。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隸の家から連れ出した、あなたの神、主である。」
(出エジプト 20・2)

十戒を犯すことは、十戒をお与えになった主なる神を侵すこと、すなわち神に対する過失を意味します。したがってあらゆる罪は、律法を与えてくださった神に対する債務であり、聖なる神のみこころを損なうことであり、神の權威と主権を侮辱することです。

さて、私たちは、律法の言うことはみな、律法の下にある人々に対して言われていることを知っています。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。
(ローマ 3・19)

「律法は罪を「債務」として明らかにし、罪人を訴え、罪に対する復讐を求めます。主なる神に對する罪の意識は、すべての人間一人一人が持っているものであり、それこそあらゆる不安と恐怖の隠れた原因です。私たち人間生活における恐怖、特に死に對する恐怖は、何というものすごい力を持っていることでしょう。

私たちは、私たちが神の戒めを守らなかったこと、そして神に對してその責任を負っていることを知っています。まことの神は、怒る神、さばく神であり、違反者を聖なるさばきで罰する神です。私たちは神の怒りの結果をいたる所で見ることができませんが、しかし神の怒りに對して語る人は、今日ではほとんどいないのではないのでしょうか。人は自分が描いている「愛なる神」という像を壊したくないために、神の怒りに對して考えたがりません。ですから人は、「怒りの神は旧約の神である」という風に考えがちですが、それがいかに神ご自身を損なう、間違ったことであるかに気がつきません。

旧約だけでなく、新約も含めた聖書全体は、さばきの神に對して私たちにはつきりと語っています。私たちに、イエス・キリストの十字架によって神の愛と救いを啓示する新約は、御子イエス・キリストとその聖めを受け入れない、すべての者に對する神の怒りに對して、恐ろしく深刻に語っています。

生ける神の手に陥ることは恐ろしいことです。

(ヘブル 10・31)

聖書の中の四つの福音書、手紙、黙示録は、「神の怒り」に對して、そしてまた、「小羊の怒り

の日」について、怒りの恐るべき日について語っています。

まだ一度も審判者としての神の恐るべき力を経験していない者は、まことの神を知っていると
は言えません。自分が今まで抱えていた快く、優しいものだけの神のイメージが幼い幻想に過ぎ
なかつたのではないかを、よく吟味しなければなりません。

3 律法は、人間のうちにある罪を明らかにします。

次に律法は人間のうちにある罪を明らかにするものであるということについて考えてみましょう。

人間が生まれつき持っている罪の性質は、しばしば人間の中に隠れた形をとっているため、は
つきりとは認識されずにいます。それは罪が、「行ない」によって明らかに現われてこないから
です。しかし隠れた罪は歴然とした事実であり、実際に存在しています。人間の中にある隠れた
罪は、知られていない体の中の病巣、つまり病気の巣のようなものであり、表に出ている病気よ
りもはるかに恐ろしく危険です。

いろいろなことを禁じる律法は、人間の中にある罪を刺激し、その結果、罪は生き生きとした
ものになり、行ないの形で現われてきます。この罪の働く結果を、パウロは自分の経験に基づい
て次のように描写しています。

それでは、どういふことになりますか。律法は罪なのでしょうか。絶対にそんなことは

ありません。ただ、律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、「むさぼってはならない。」と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう。しかし、罪はこの戒めによつて機会を捕え、私のうちにあらゆるむさぼりを引き起こしました。律法がなければ、罪は死んだものです。私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。

(ローマ 7:7-9)

律法は、人間のうちにあるものを明らかにします。つまり律法とは、人間のうちにまどろんでいる自我という虎を刺激し、その結果その虎が飛び上がり、正体を現わすように働くものです。

私たちはこのことを、イスラエルの歴史の中にも見ることができます。イスラエルの民は、自分たちのことがよくわかっていませんでした。主がイスラエルの民に律法をお与えになったとき、彼らはその律法を守るのは簡単なことだと考えてしまったのです。つまり、イスラエルの民は、「やろうと思えばさえずれば、すぐにできるに違いない」と思い込んでしまったのです。ですから十分を考えることもしないで、彼らは次のように答えてしまったのです。

すると民はみな口をそろえて答えた。「私たちは主が仰せられたことを、みな行ないます。」それでモーセは民のこぼを主に持つて帰った。

(出エジプト 19:8)

しかしこの言葉は、あまりにも軽率な思い上がった言葉でした。ですから主は、それゆえに律法を通して、イスラエルの民に対して彼らの心のうちにあるものがどのように罪深いものである

かを示されなければなりません。

「どうか、彼らの心がこのようであつて、いつまでも、わたしを恐れ、わたしのすべての命令を守るように。そうして、彼らも、その子孫も、永久にしあわせになるように。」

(申命記 5・29)

イスラエルの民の心のうちに何があつたかは、すぐ明らかになりました。彼らはモーセが十戒が刻まれた石の板を持つてシナイ山から降りてくる前に、すでに口を通して彼らに語り伝えられた戒めを、もつとも恥ずべき形で破つてしまつたのです。

神に対するイスラエルの民の關係を表わした第一の戒めと第二の戒めは、簡単に破られてしまいました。イスラエルの民は、金の牛の像を作つてその周りを踊りまわつたのです。

そこで、民はみな、その耳にある金の耳輪をはずして、アロンのところに持つて来た。

彼がそれを、彼らの手から受け取り、のみで型を造り、鑄物の子牛にした。彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上つたあなたの神だ。」と言つた。

(出エジプト 32・3、4)

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。」(出エジプト 20・3)と
いう第一の戒めは、民のうちにある偶像崇拜的な思いを明るみに引き出しました。40年に及ぶ荒野を旅したときを振り返りながら、モーセは聖霊を通して次のように証しをしました。

「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならぬ。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」
(申命記 8・2)

このような主の導きは、今日も変わらず、主はいろいろな試練や困難を通して、人間の心のうちにあるものを明らかに示そうとなさいます。主は神の戒めに人間が従うか、従わないかの決断をするために、律法という尺度、律法という機会を与えられるのです。律法に照らして、私たちのうちにあるものを正視するとき、それは非常な衝撃をもたらします。私たちは、自分のうちにある恐ろしい状態、罪の恐るべき力を認識するとき、打ちのめされてしまいます。

あらゆる人間は、どんな罪でも犯す可能性と能力を持っています。こうした認識は非常に恐ろしいものですが、しかし必要です。というのは罪の力を真に認識した者だけが、神の恵みを求め始めるからです。

4 律法は、罪人を訴えます。

罪人にとって、神の戒めはどのような意味を持っているのでしょうか。その答えは、「罪人を訴えるため」です。神の律法によって、罪の認識が引き起こされ、神に対する債務が明らかにされてから、罪を犯した人は神の前に訴えられるのです。

主なる神の律法は、厳格でなさけ容赦ないものです。その人がいくらいい人であっても、そうした人柄とは無関係に、その人が律法を犯したときにはのろいのもとに置かれ、特別に刑を軽くすることはなさいません。

というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」

(ガラテヤ 3・10)

律法は、それ自身が律法違反者の厳しい裁判官であり、一度でも戒めを犯した者の上に、剣を振り下ろします。

それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。

(ローマ 7・10)

このような恐ろしい状態の中に、ほとんどの人々が置かれています。彼らは死刑囚として死の独房の中に閉ざされ、死刑の判決が下されたからには、まもなく行なわれる死刑執行の瞬間を待つだけです。この状態を聖書は、「滅びる」ということばで表現しています。

私たちはみな、一人の例外もなく、滅びに至る者として定められています。その結果、罪人である人間は、律法によって恐ろしいほどの絶望的な状態に置かれます。罪人は自分が債務を負った者であること、そしてまた神によってのろわれた者であることを知るようになります。罪を認

識するようになった罪人の人生は、ただ主なる神のさばき、律法に逆らう人たちを焼きつくす激しい火を恐れながら待つよりほかはないのです。

ただ、さばきと、逆らう人たちを焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。
(ヘブル 10・27)

5 律法は、恵みに導きます。

このような絶望的な状態に置かれた人間に対して、律法のもっとも大切な使命は、罪人を救ってくださるお方、「イエス・キリストのみもとに罪人を導く」ことです。律法は、ただ単に罪人を訴えるだけではなく、いのちへと導く働きをもするものです。律法によって滅びゆく人間は恵みを求めるようになります。ですから聖書には、「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(ガラテヤ 3・24)と記されているのです。

自分の罪に絶望した罪人にとって、唯一つの逃れ道は、イエス・キリストを信じることです。自分の行ないによって、神の前に義とされようと試み、挫折してしまったとき、その人はじめて真に主の福音を聞く耳を持つようになります。

人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。
(ローマ 3・28)

絶望し、死刑の判決を下され、滅びに定められ、のろわれた罪人にとって、次のみことばは何とすばらしい喜びの訪れでしょう。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。
(2コリント 5・21)

主イエス様が遣わされた目的は、何だったのでしょうか。

これは律法の下にある者を贖い出すためで、その結果、私たちが子としての身分を受けられるようになるためです。
(ガラテヤ 4・5)

イエス・キリストによる救いの事実は、次のみことばによって明らかにされています。

すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。
(ローマ 3・23～25)

さらにくわしく、私たちはこのすばらしい福音について見てみましょう。イエス・キリスト

は、「世の罪を取り除く神の小羊」になられました。イエス様は、人間の律法へのあらゆる違反を、ご自身をなげうってその身に受けてくださいました。主イエス様は私たちの債務をすべて贖ってくださいました。イエス様は、十字架につけられ、すべての人間の律法違反を、ご自身で引き受けられ、律法の違反者であるわたしたちに代わって、いのちを捨てて犠牲となってくださいました。律法の違反者に対する神の判決は死です。その死を、主イエス様は自ら血を流して引き受けてくださいました。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

(1ペテロ 2・24)

主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

(イザヤ 53・6)

イエス様は、私たちの代わりに神の罰をご自身の身に受けてくださったのです。神から捨てられ、のろわれることほど、恐ろしい刑罰はありません。しかしイエス様は、私たちに代わってこの恐ろしい刑罰を受けてくださいました。詩篇の22篇ほどイエス様の苦しみをはっきりと預言し、描写している箇所はありません。また、十字架上でこの22篇の冒頭を叫ばれたイエス様のことを頭に描きながらこの詩篇を読むとき、主が十字架の上で「完了した。」(ヨハネ 19・30)と叫ばれたことばの深い意味を理解することができます。

罪の赦しを得た人は、次のように告白することができます。

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべて、のろわれたものである。」と書いてあるからです。

(ガラテヤ 3・13)

罪の赦し、債務の抹消、イエス・キリストの義、これらはすべて、私たち罪人に対し、イエス様を通して主が提供してくださいました賜物です。絶望していた者は、提供された賜物をつかみ、滅びに沈んでいく者もまた、なんの問題もなく提供された救命具にしがみつくことができるのです。

今日、私たち人間にとって必要なことは、「罪人に対する神の戒めの必要性」を、強く、深く、認識することです。現在では自分の罪を認めている人は非常に少ないので、まことの改心を経験する者も非常に少ないのです。私たちは神の恐るべき判決について何も知らないゆえに、恵みについてもまた知ることが少ないのです。この世には自分は健康であり、自分は正しいと思っている人が大勢いますが、悲しいことにイエス様はそのような人たちの傍らを通り過ぎて行かざるをえなくなっています。

「わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

(マタイ 9・13)

現代人は自分自身に対して何と盲目なのでしょう。自分自身のことについては、ほとんど何も知らず、神の戒めを守ることにしても安易に考え、神と人の前に自分は正しい者だとすぐに思い込んでしまいます。今日とりわけ必要なのは、律法に基づき聖霊を通して引き起こされる罪の認識です。なぜなら、主はそれを通して悔い改めの賜物を送ってくださることができるのであり、イエス・キリストを罪人の救い主として認め、また受け入れることが可能になるからです。罪の意識があつてはじめて、イエス様の足元に罪の女のようにひれ伏し、パウロとともに次のように告白する人々が大勢出てくるようになるでしょう。

キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

(ピリピ 3・9)

今まで見てきたことをまとめましょう。「律法の結果、罪人は、罪人の救い主、イエス・キリストにまで導かれ」ます。イエス・キリストが私たちの罪の代わりに罰せられたから、イエス様の死は罪人の新たな人生の土台となったのです。その結果、罪人は贖われた者となり、失われた者は救われた者となり、神に対する反逆者は神の子となり、汚れた者は、きよめられた者となり、正しくなかった者は正しい者となりました。

モーセの十戒は、すでにイエス様を信じる者にも大きな意味を持っています。十戒が聖なる神のみこころの表われであることは、前に見た通りです。したがって神のみこころ、つまり神の戒

めは信者にとつても大切な意味を持っているのです。

神のみこころが、信者の生活にとつて基準となるものだということ、確かです。というのは、神を信じるということは、神のみこころを認めて行なうということだからです。

しかし、よく考えていただきたいのは、信者にとつて神の戒めはまったく新しい意味を持つということ、罪人がイエス・キリストのみもとに来ることによつて、「罪人に対する律法が果たすべき使命は解決」します。救われた者は、もはや判決を下し、さばきを与える権力としての律法の下にはいません。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。
(ローマ 8・1)

イエス・キリストが代わりに罰せられたからです。律法は、もはや手に鞭をもつて、神の要求を人間に向ける養育係ではありません。

しかし、人は律法の行ないによつては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によつて義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによつてではなく、キリストを信じる信仰によつて義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによつて義と認められる者は、ひとりもないからです。
(ガラテヤ 2・16)

このことを私たちは知っていますから、もはや自分の力で律法を守ろうとする試みを止ません。私たちはイエス様を信じるがゆえに、神の前に義と認められていることを知っています。ですから私たちは自分の手柄によって義と認められる必要はありません。イエス・キリストの義はそれだけで充分です。

律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。
(ガラテヤ 5・4)

このみことばは何と厳しいことばでしょうか。

しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。
(ヘブル 12・22)

しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。
(ガラテヤ 4・26)

モーセの十戒はシオンの山でも、エルサレムでもなく、シナイ山で与えられたものですが、シナイ山は救いを与える山ではなく、隷従をもたらす山です。そしてゴルゴタの丘に立てられた十字架のゆえに、私たちはさばきと隷従から解放されたのです。

それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。
(ローマ 7・10)

私たちは、ローマ書7章10節のみことばによると、律法によって死んだ者となり、そして死んだ人々はあらゆる律法から解放されています。

あなたがたは喜びながら救

いの泉から水を汲む。

(イザヤ 12・3)



3章

信者に対する律法の意味

私たちはこれまで律法の意味について考えてきましたが、それは「未信者に対する」律法の意味についてでした。ここからは、「信者に対する」律法の意味をご一緒に考えていきましょう。ポイントは4つです。

- 1 神の賜物として与えられる義
- 2 神の戒めを喜ぶキリスト者
- 3 十戒を守ろうとするキリスト者の敗北
- 4 御霊の実としてのみこころの実行

1 神の賜物として与えられる義

主イエス様だけが、律法を完全に満たされました。私たちはまず、この地上における主イエス様の歩みをたどって、モーセの十戒と照らし合わせ、その尺度でイエス様のなさったことを見てください。イエス様の言葉、行動、考え、感情、その他すべてのことを調べても、そこには一つの罪の影すら見出すことはできません。主イエス様は、ご自分の敵に向かって次のように言うことがおできになりました。

「あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。」

(ヨハネ 8・46)

誰一人として主イエスを責めることのできる人はいません。近づきたい聖なる光の中に住みたもう主ご自身、主イエス様の中にひとかけらの罪も見出されないので、反対に「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」（マタイ 3・17）と言われたのです。

イエス・キリストご自身こそが神の義そのものです。イエス様は私たちの罪と債務をご自分の身に受けてくださり、十字架の上で罰せられ、救いの道を開いてくださいました。イエス様は、流された血潮という尊い代価を支払って、私たちを贖ってくださいました。ですから私たちはイエス様のものなのです。そして私たちは、イエス様を受け入れることによって、イエス様の持つておられるものをいただくことができます。つまり私たちは、イエス様の義をいただくことが許されるのですから、主が私たちをご覧になるときには、いつも「イエス様のうちにある私たち」をご覧になるのです。そして私たちのうちに住んでおられるイエス様だけが、モーセの十戒の唯一の実行者なのです。

イエス様を通して、私たちは義と認められるようになり、イエス様の義を持つ者となりました。イエス様の義は永遠に常に変わることはありませんから、私たちの持つている義もまた、とこしえに変わることがありません。私たちはみなイエス様に従っていても罪を犯す可能性がありますが、与えられたイエス様の義は決して汚されることはありません。たとえどのような罪や問題があつたとしても、私たちに与えられたイエス様の義はとこしえに変わることなく完全です。ですから私たちもイエス様にあつて完全な者とされているのです。

そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。

(コロサイ 2・10)

イエス様が私たち人間の罪のためにどれほど苦しまれたかを知る者は、安易に罪を犯したり、敗北のあとに平気な気持でいたりすることはできません。ですからもし罪を犯したならば、そのときには大きな痛みを持ってイエス様のもとに行き、新たにイエス様の義を喜ぶ者とされる恵みをいただくことができます。私たちが主の前に立つときを考えると、イエス様によってモーセの十戒がすでに完全に満たされているということは、何という大きな慰めでしょうか。

私たち自身はまことに不完全で、裸で、みじめな者ですが、イエス様のうちにある私たちは主の前に非難されることがなく、主に受け入れられる者とされているのです。言うまでもなく、私たちは自分の努力や手柄によっては、主の前に決して義とは認められません。しかしイエス様が与えてくださった義によって、私たちはいつも完全な者とみなされるのです。

神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださったのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。

(ローマ 8・33、34)

2 神の戒めを喜ぶキリスト者

イエス様はただ単に私たちのために身代わりとなって十字架上で死んでくださったというだけではなく、それによって私たちのうちに何か新しいものが生じたのです。私たちのもつとも深いところで、新しい変化が生まれました。私たちはイエス様とともに葬られ、よみがえったのです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

(ローマ 6・6)

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。

(ローマ 6・4)

「私たちの古い人」つまり生まれながらの性質は神の戒めを喜びません。なぜなら「私たちの古い人」にとっては戒めは嫌でたまらない強制そのものであり、何とかしてそれから逃げたいと思うような者ではないからです。しかしこのような古い性質は、イエス様の十字架の死によってその力を奪われました。そして今や、まったく新しい者として、イエス様のいのちが与えられ

たのです。

イエス様の人生における最大の喜びは、父なる神のみこころを行なうことでした。

イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」

(ヨハネ 4・34)

すなわち、主イエス様のいのちは神の律法を喜ぶものです。

すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいるのに、…

(ローマ 7・22)

回心を経験した者は、ローマ人への手紙の7章12節の「律法は聖なるものであり、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。」ということを認めます。ですから、モーセの十戒は信者にとってまったく新しい意味を持っています。信者は律法を、主の聖なるみこころとして認め、主を愛するがゆえに、主の律法と命令をもこよなく愛します。

主の律法との関係は律法をお与えになった主との関係を整えることによって、まったく新しいものとなります。人は主を父と呼んでいながら主の律法を無視することはできません。主の戒めは、主のみこころそのものの表われです。

「この律法の書を、あなたの口から離さず、昼も夜もそれを口ずさまなければならぬ。そのうちにしるされているすべてのことを守り行なうためである。そうすれば、あな

たのすることで繁栄し、また栄えることができるからである。」 (ヨシユア 1・8)

詩篇119篇のみことばを読むときに、イエス様が主の律法に対していかに深い愛を示されたか、そしてまたイエス様の人生の秘訣がどこにあったかを知ることができます。そしてまた、この詩篇の作者も、私たちも、イエス様と同じような性質をいただいていることがわかります。

私は、あなたのおきてを喜びとし、あなたのことばを忘れません。(詩篇 119・16)

私のたましいは、いつもあなたのさばきを慕い、碎かれています。(詩篇 119・20)

あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。(詩篇 119・72)

あなたの仰せは、私を私の敵よりも賢くします。それはとこしえに、私のものだからです。(詩篇 119・98)

私は、あなたのさとしを永遠のゆずりとして受け継ぎました。これこそ、私の心の喜びです。(詩篇 119・111)

私は、わが神の仰せを守る。(詩篇 119・115)

それゆえ、私は、金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します。(詩篇 119・127)

私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。(詩篇 119・131)

あなたのみことばは、よく練られていて、あなたのしもべは、それを愛しています。(詩篇 119・140)

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。(詩篇 119・162)

あなたの義のさばきのために、私は日に七度、あなたをほめたたえます。(詩篇 119・164)

私はあなたの救いを慕っています。主よ。あなたのみおしえは私の喜びです。(詩篇 119・174)

このようなみことばは、私たちの心に深く響いてくるでしょうか。それともまったく無関心でいられるでしょうか。

私たちが改めてモーセの十戒を読むとき、それはもはや奴隷に対する主人の冷たい鞭ではなく、私たちのきよめと栄光を望む主の愛の表われであることがわかります。回心した者の特徴は、主の戒めを喜ぶことです。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント 5・17)

モーセの十戒を通して示された主の基準は、どのような人間の道徳にも勝るものです。イエス様によって贖われた人間は、みこころにかなった生活をしたいと願い、主の戒めを心から切望する者です。

3 十戒を守ろうとするキリスト者の敗北

キリスト者は自分の喜びである主のみこころを、心から行ないたいと思いますが、実はそのときから大変な失望が始まります。おそらく全身全霊を持って一生懸命にがんばれば、ひとつふたつの戒めを守ることはできるかもしれませんが、しかしすぐにまた誘惑がおそってきて、その誘惑に負け、大きな敗北を経験することになります。

戦いはますます深刻で激しいものになります。信者は、行ないに現われたいとしても、戒めを守ることは絶対にできない、ということにすぐ気がつくようになります。つまり、罪の思いや感情が生じると、自分ではどうすることもできないということに気がつくのです。たとえば表面上は姦淫の罪を犯していないようでも、心の中で罪深い情愛を感じるときには、第七の戒めを守ったことにはなりません。実際には泥棒をしなかったとしても、心の中でほかの人の財産や成功をねたむ気持を持っていれば、それは第八の戒めを破ったことになります。

信者は主の戒めを正しく守ろうとすればするほど、実際にはそれが守れないことを、いやというほどに思い知らされます。信者の生活とは、絶えず上に行ったり下に行ったり、立ったり倒れたりするようなものです。信者はいつも心を新たにしてい戒めを守ろうとするのですが、いつも同じ敗北に終わってしまいます。主の律法を堅く守ろうとすればするほど、その結果は絶望的な戦いになり、しばしば精神病になるほどの心の重圧を引き起こしてしまいます。その結果、信者は、「主の戒めを守ることができない」という事実を認めざるをえなくなります。こうした認識は、信者の信仰生活における大きな危機であり、「イエス様の血による贖い」という福音によって救われ助け出されなければ、信仰の挫折、難破となってしまう、破れた翼をもった鳥のように、飛ぶ試みをすべてあきらめる、という結果になります。

イエス様は、モーセの十戒を守ることを、信者にまったく要求なさらない、ということを知るとき、それは信者にとって大きな慰めと解放を意味します。未信者だけでなく信者もまた主の律法を実行することはできません。このことを新約聖書ははっきりと私たちに語っています。

私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。
(ローマ 7・19)

これは、決して未信者の叫びではなく、信仰者の模範とされているパウロが、霊的な戦いを行なった結果としての叫びなのです。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。
(ローマ 7・24)

回心の経験をした人が、死の体から解放された人間であるならば、神の戒めを守ることは簡単なことだったでしょう。しかし、キリスト者についてもこの体を持つ限り次のように言わざるを得ません。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

(ローマ 7・18)

罪は私たちの肉体の中に入り込んでいますから、私たちがこの体を脱ぎ捨てるまでは、私たちの中に止まります。そして信者でさえも罪に対して抵抗する力を持っていません。罪は恐ろしい力を持って立ち向かってくるので、人間は、敗北せざるをえません。

主の戒めは、私たちにとってそのときいったい何の役に立つのでしょうか。つまり主の戒めというのは、私たちが決して到達することのできない理想にすぎないということなのでしょうか。残念ながら、多くの信者にとってモーセの十戒は確かに理想にすぎず、罪を犯してはまた赦しを乞い求める、という毎日を繰り返しています。

主イエス・キリストの救いは、本当にそのようなものにすぎないのででしょうか。もしもそうだとするならば、それは実に悲しむべき状態であり、信者は未信者よりも深く罪を認識し、いつそ罪に苦しみ、罪の奴隷にとどまらなければならぬことになるでしょう。

決してそうではありません。イエス様の救いは、単なる罪の赦しではなく、罪の力からの解放をも意味しているのです。

神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。

(ローマ 6・17、18)

しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。

(ローマ 6・22)

罪の力から解放された人生は、イエス様によって保証されています。それは十戒を通して表わされた、聖なる神のみこころを実行することです。

4 御霊の実としてのみこころの実行

キリスト者にとつてもっとも大切なことは、霊的な破産を経験することです。本当に破産してしまつたなら、もはや自分の力で神の戒めを実行しようとする努力を止めてしまいます。

勝利の秘訣は、聖霊を通してキリスト者のうちに住んでくださるイエス・キリストにあります。イエス様の救いのみわざはまったく完全なものです。自分の力で神の戒めを実行しようとしても、それは完全な敗北に終わるに決まっています。

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。
(ピリピ 1・6)

イエス様は、私たちに罪の赦しを与えてくださっただけではなく、目的地に至るまで、私たちを導いてくださるお方です。キリスト者はだれでも、イエス様が十字架の上で流された血潮によつて、罪の赦しを得ています。そしてイエス様の復活により、私たちは主の永遠のいのちにあずかる者となりました。私たちの心のうちに聖霊が働いてくださることによつて、私たちは神のみこころになつた新しい生活を行なうことができます。

次の事実をしっかりと心に留めましょう。イエス・キリストを自分の個人的な救い主として受け入れた人は、イエス・キリストだけではなく、聖霊の賜物をも同時にいただいたのです。イエ

ス様は聖霊を通してあらゆる信者の中に住み、生き、働いておられます。

こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。

(エペソ 3・17)

またあなたがたも、キリストにあつて、真理のことは、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。

(エペソ 1・13)

イエス様は、かつてこの地上を歩かれたお方、そして神の律法を完全に実行したお方とまったく同じお方として、私たちのうちに生きておられます。そして主の最高の願いは、私たちの生活を通して、主のみこころが完全に現われることです。

イエス様がこの地上に來られたときになされたことを、主は今もなお私たちのうちにあつて成してくださいます。私たちのうちにおられるイエス様は、今もなお、私たちを通して聖なる完全な生活をなさることができません。

イエス様は、あなたが置かれている環境の中でそのままあなたを愛することがおできになり、さまざまな誘惑の中で勝利を収めることができになります。またあなたにとつて荷が重すぎる課題を成しとげることもおできになります。キリスト者のうちに住んでおられるイエス様こそが、新しい生活の秘訣です。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

私たちはもはや一人ぼっちではありません。イエス様は、ただ単に私たちと共におられるだけでなく、「私たちのうち」におられ、私たちを支配してくだり、私たちの考え、感情、意思、そして私たちのうちにある罪さえも、支配してくださるのです。

すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。

(エペソ 1・21)

すべての上に高く置かれたイエス様は、私たちのうちに住んでおられ、私たちのうちにある罪を抑え、神の戒めを実行できる力を与えることができるお方です。

イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行ない、あなたがみこころを行なうことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

(ヘブル 13・21)

キリスト者は、罪を犯す必要はないのですが、それでも罪を犯すことができるのです。信者は何としばしば、無知や、目覚めていないことから、罪の奴隷となり、再び罪の性質によって支配されてしまうことでしょうか。信者として罪を犯すことはもとの「古い人」の状態に戻ることを意味しています。それは、ちょうど放蕩息子が父の家に戻った後で、再びもとの悪い古巣に戻り、そこで再び豚飼いとして振舞うようなものです。それは必要のないことですが、多くの信者がしばしば経験することです。

キリスト者として、また解放された者として、私たちの犯した罪を赦してください、一瞬一瞬の意識、無意識の汚れから私たちをきよめてくださる主の恵みは、何とすばらしいものでしょうか。これこそ、罪深い、罪を犯しやすい信者にとってのすばらしい福音にほかなりません。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(1ヨハネ 1:7)

イエス様は、過去においてきよめてくださっただけでなく、今もなお私たちが悔い改めるときよめてくださるのです。

イエス様の流された血潮はいつも私たちをきよめてくださる力であり、それによって私たちは、いつでも安心して主なる神に近づくことができます。私たちのうちにあるイエス・キリストこそが、神の力です。

モーセの十戒は、聖霊を通して与えられました。そして聖霊の目的とするところは、私たちの日常生活を通して神の戒めを実行することです。聖霊はすべてのことができるお方です。

主なる神は私たちに聖霊を与えてくださいました。ですから主は、聖霊に満たされた生活を、私たちに要求することができますのです。

聖霊が臨在しておられるところには、聖霊の性質が現われてきます。

聖霊が働いてくださるところには、御霊の実が現われてきます。

聖霊が支配しておられるところには、罪の支配からの自由があります。

聖霊が働いておられるところには、力が満ちます。

聖霊が行なわれるところには、いのちがあります。

ひとことではいえば、聖霊から出てくる生活、聖霊による生活、そして聖霊に従った生活は、聖霊の性質の現われです。それはちよぶどうの実の中に、ぶどうの木の性質が現われ、りんごの中に入りんごの木の性質が現われてくるのと同じです。

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。
(ローマ 8・14)

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

(ガラテヤ 5・22、23)

光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。

(エペソ 5・9)

以上の聖書の箇所によって、私たちは、御霊の実を正しく知ることができましたが、モーセの十戒もまた同じように、神のみこころを現わすものです。

聖霊の働きによって主に頼る者は、神の戒めを守る者となります。いわゆる十戒はもはや単なる要求ではなく、自発的に現われてくるイエス様のいのちの結果です。

ぶどうの木にとつて実を結ぶことは、決して外からの要求や戦いではなく、その内側から出てくる自然の現われなのです。

私たちも、御霊の働きに従うなら御霊の実を結ぶことができますが、自分勝手な自我に従うなら肉の働きを生じるだけです。御霊の実と肉の働きの間には、何という大きな違いがあることでしょうか。

肉の行ないは明白であつて、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、醜妬、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。

(ガラテヤ 5・19～23)

私たちの日常生活にとって、もっとも大切な命令は次のとおりです。

御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。
(ガラテヤ 5・16)

聖霊の力によって、モーセの十戒はまったく新しい光に照らされ、御霊によって実行することが可能となるのです。イエス・キリストは、十戒を聖なる神のみこころとして弟子たちに示され、主もまたご自身の戒めである戒律の実行を、弟子たちに要求なさいました。

「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」
(ヨハネ 14・15)

「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。」
(ヨハネ 15・10)

私たちとイエス様との関係は、主の戒めをどのように守るかによって決められます。私たちは昼も夜も主の戒めを思い、主の愛を覚え、真剣に考え、それを愛すべきではないでしょうか。

パウロは、エペソの信者たちに家庭生活のあり方を示そうとしたとき、十戒のうちの五番目の戒めを引用し、わかりやすく次のように説明しました。

子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなた

の父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。

(エペソ 6・1、2)

これは、主に喜ばれる生活とは主の戒めを実行することである、ということを示しています。戒めを守ることは主に対する愛の証明であり、主の家族に属していることの証拠です。

もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いていながらありません。むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです。しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとつても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。光の中にあると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまずくことはありません。兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩んでいるのであって、自分がどこへ行くのか知らない

のです。やみが彼の目を見えなくしたからです。

(1ヨハネ 2・3～11)

神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。

(1ヨハネ 5・3)

このように、神のみこころであるモーセの十戒は大切なものであり、私たちの日常生活を通して、もはつきりと現われなければなりません。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(2コリント 3・18)

現在私たちは、この地上でまだ主のご栄光を反映させている者とは言えず、そのことは私たちの大きな悩みと苦しみになっています。しかし将来、主は私たちを完全な栄光のうちに変えてくださり、しみも汚れもない者として、父なる神の御前に立たせてくださるのです。

今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。

(コロサイ 1・22)

イエス様を通して、父なる神のみこころが完全に現われたように、私たちの場合もまた、同じようになさるのです。主に仕える者たちを通して、主の聖なる戒めは「実行された現実」として現わされるのです。

もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあつて、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。

(黙示録 22・3、4)

ですから、私たちはこの地上にいる限り、その生活の中に、聖い恐れと崇拜をもって、モーセの十戒を主のみこころの現われとして覚えましょう。そして、聖書の一番最後に記されている「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」(黙示録 22・7)というみことばが、私たちの完成のための神の戒めの意味を持っている、ということもいっしょに覚えましょう。

私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。

(黙示録 22・18、19)

それでは、次にモーセの十戒について詳しく学ぶ前に、手始めとしてその概略を見てみることに

にしましょう。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」
(出エジプト 20・2)

モーセの十戒は、私たちにとって大いなる宝物です。なぜならそれは、主なる神ご自身によって与えられたものだからです。主なる神は、二つの石の板の上にご自身の指でもって十のことは書き記されました。そしてイスラエルの民が偶像崇拜をしたことに対して、モーセが怒ってその板を打ち砕いたとき、主はモーセが持ってきた新しい板の上に、再び十の戒めをお書きになったのです。

これは、主ご自身がお書きになったただ一つのもので、ですからモーセの十戒は、神にとつてきわめて重大かつ神聖なものです。

したがって私たちは、モーセの十戒を、私たちに対する主の特別な言葉として、恐れとおののきをもって読む必要があります。

こうして主は、シナイ山でモーセと語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち、神の指で書かれた石の板をモーセに授けられた。
(出エジプト 31・18)

主はモーセに仰せられた。「前と同じような二枚の石の板を、切り取れ。わたしは、あなたが砕いたこの前の石の板にあったあのことを、その石の板の上に書きしるそう。」

彼は石の板に契約のことは、十のことは書きしるした。

このようにして主はただ単に石の板の上に、戒めを書いてくださっただけでなく、すべての人間の心に主の戒めを刻み込んでくださいました。主は、あなたの心にも十戒を書きしるしてくださいました。あなたは、たとえまだ一度も聖書を通して十戒を読んだことがなかったとしても、必ずそれを知っているはずで、何が正しく、何が正しくないか、何が善で、何が悪であるかということは、私たちの心の中に深く刻まれているはずで、人間に与えられている良心は、十戒を肯定し、それが無条件に神聖で完全に良いものであることを認めています。

私たちのうち誰ひとりとして、この十戒を人生の基準として子孫に伝えることをためらう者はいないでしょう。私たちはみな、十戒こそが政府や行政機関の土台となつてほしいと願うでしょう。しかし神ご自身が書いてくださった十の言葉、モーセの十戒は、今日では人々の生活や、国民全体の生活の大切な基準として真剣に考えられることは、きわめてまれなことになってしまつています。

モーセの十戒が、無条件に大切な基準とされていたなら、私たちの考えや行動の基本ははるかに明確なものとなつていたことでしょう。そして私たちが、聖霊が私たちを形造つてくださるう

としておられる姿を見たいと、切に望んだなら、私たちすべての者の内におられる聖霊の働きは、より深いものとなったことでしょう。

私たちは、確かに主なしには何もできません。しかしそれと同じように主もまた、私たちがなしには何もしたいと思われません。主は、私たちとともに働くことによつて、みわざを現わしたいと望んでおられるのです。

どんなにすばらしい考えと天才的な能力を持つている偉大な芸術家といえども、材料がなければどうすることもできません。それと同じように、主は、材料であり器である私たちを用いたいと思つておられるのです。

主の目的は、イエス様を通して、またモーセの十戒を通して、明らかにされています。主がどういう人間を望んでおられるかは、イエス様と十戒を見ればわかります。ですから大切なことは、ただ単にモーセの十戒を知るだけでなく、私たちを通して「具体的、現実的な形」を造り出すことです。モーセの十戒では、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」(出エジプト 20・2)と記されている前書きが大変重要です。この主のみことばは、単なる言葉ではなく、主の啓示です。主の啓示は全体の土台であり、この啓示がなければ、十戒は正しく知ることができず、無意味な言葉となつてしまいます。「わたしは、あなたの神、主である。」このように主はご自身を啓示してくださつたのです。

このみことばの語り手は人間ではなく、生けるまことの神です。そして生けるまことの神はご自身が造られた人間に、神の戒めをお与えになる権利を持つておられます。主は大切な教えを人

間にお与えになる前に、ご自身を啓示してくだつたのです。このことは、私たち人間がまず最初に神を知り、主なる神の前に黙つて立つことが大切であることを示しています。なぜなら、語られた言葉よりも、その言葉を語っておられる方が誰であるかが、はるかに重要だからです。

「わたしは、主である。」というみことばの中の「主」という名前は別のところに、「わたしは、『わたしはある。』という者である。」(出エジプト 3・14)と記されています。このお名前の中に、深い意味が示されています。「主」ということばの原語は、三つのヘブライ語の動詞から構成されています。その動詞は、まず第一に「主はいました」、第二は「主はいます」、第三は「主はいますであろう」という、過去、現在、未来の三つの時制を表しています。

モーセに現われた神のお名前こそ、旧約聖書全体における神の啓示そのものです。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならぬ。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた。』と。」 (出エジプト 3・14)

新約聖書で啓示されている主のお名前は、これとまったく同じです。

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。

「わたしはアルファであり、オメガである。」 (黙示録 1・8)

私たちが主の戒めについて考えたいと思うと、主はすでに、「わたしは、主である。」と言われ

て私たちの前にお立ちになります。私たちの理性は主の偉大さをつかむことができず、また理解することもできません。

主は永遠から永遠にわたって、無限の過去から無限の未来にわたって、永遠のお方です。主は、「わたしはある。」とすることがおできになります。ですから、主は今も他のいかなる権威とは比べものにならない最高のお方として、存在しておられるのです。主はまことに「すべてのすべて」であられ、あらゆるものの上に君臨しておられます。「わたしは、主である。」と主は言われます。ですから主だけが、最高の権威をもって、何が正しいか何が正しくないかをお決めにすることができるとのことです。

人間は万物の尺度ではありません。また、世論が決定的な意味を持つものでもありません。多くの人々が語ることが大切なのではなく、「わたしは、主である。」と仰せになるまことの主だけが大切です。

しかし、主のお名前にはもつとすばらしい意味があるのです。「主」という名前のなかには、同時に「救い」ということが含まれており、さらにイエス様、つまり贖い主、救い主ということばが含まれているのです。すなわち十戒が与えられる前に、すでに主なる神は、救いを与えようと決めておられたのです。実際にイエス様がこの地上に來られたとき、イエス様は、「わたしがそれです。」「わたしはいるのです。」「わたしは…です。」とおっしゃいました。これは十戒のなかに書かれていた言葉を、そのままイエス様がお使いになったからです。

ヨハネによる福音書の特徴の一つは、「あなたと話しているこのわたしがそれです。」(ヨハネ

4・26)、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」(ヨハネ 8・58)、「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」(ヨハネ 8・12)というイエス様のみことばにあります。それはモーセの十戒がイエス様を通してはつきりとした形をとったことを意味しています。

罪を罰しようとする「引き抜かれた剣」ではなく、救いを与え、助けを与える主の「御手」こそが、律法の石の板を刻まれたのです。そして私たちは石の板に刻まれた神の意志の最初の啓示を、はつきりと知ることができるのです。

「わたし、このわたしが、主であって、わたしのほかに救い主はいない。」

(イザヤ 43・11)

ここで明らかなのは、「主」と「救い主」とは同じ方だということです。このお方だけが、罪を赦し、死から解放してくださいることができます。つまり、律法をお与えになった方は、同時に恵みを与えるお方です。ですから十戒を通して、実は希望の光が私たちに与えられました。また、ただ単に「神」ではなく、「あなたの神」と言われることは何とすばらしいことでしょうか。

創世記1章1節に、「神」という同じ名前が出てきます。この名前(ヘブライ語 Elohim)を通して、もつとも強く最高の創造主が、ご自身を明らかに表わされています。

創造主であるお方は、天と地をお造りになっただけでなく、私たち人間をもお造りになりました。ですからこの方こそ、私たち人間の生活を決定し、命令し、禁止することがおできになるお方です。

「あなたの神」という啓示、呼びかけによって、偉大な主は私たちに近づいてくださり、私たちの生活領域に入ってください、私たちの人生を支配してくださいとさうとしておられるのです。

主なる神は、「あなたの神」という啓示によって、まず最初にご自身をアブラハムに現わされました。

「次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたを守るべきわたしの契約である。」
(創世記 17・10)

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。」
(創世記 17・7)

「あなたの神」という表現は、主なる神とイスラエルの民との契約、それも永遠の契約を意味しています。主なる神は御子イエス・キリストが流された血潮に基づいて、私たちと契約を新たに結んでくださいました。血潮によって贖われた者は永遠に主なる神の所有物であり、したがって永遠の安全を保障されているのです。

主なる神がイスラエルの民に与えられた約束は、次の通りです。

「それらの日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」
(ヘブル 8・10)

貴い血潮によって、あなたと契約を結んでくださった「あなたの神」は、あなたの生活のすべてを支配する権利を持つておられます。ですからあなたにとつて大切なことは、神の聖なるみこころは何であるかを知ることです。あなたは、みことばの光に対して心を開くとまったく新しい者に造り変えられます。

すでに一度、自分の生活を主なる神に明け渡した人でも、その後、自分勝手な生き方をしてしまうことは少なくありません。こういう人々の主に対する信仰は、単なる飾り物であつて、実際はそれが日常生活や仕事と密接に結びついていないのです。こういう人々はまた、自我に基づいて自分が良いと思つたこと、動機が良ければそれで良いと思ひ込んで、行動してしまいます。イスラエルの歴史の暗黒時代は、そのような状態に陥つた時代でした。

そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なつていた。
(士師記 21・25)

「どうしても不幸になりたい」と思う人は、「自分の目に正しい」と見えることを行なえば不幸

になります。

多くの混乱は、この世だけでなく、キリスト者の生活の中にも存在しています。その混乱とは、無政府状態みたいなものです。実際に当時のイスラエルには王もなく政府もなかったので、めいめいが自分勝手なことをして、ばらばらになってしまったのです。「わたしは、あなたの神、主である。」という言葉は、そのような無政府的な生活状態の中に、さしこむ稲妻の一撃です。破滅的な生活は、稲妻の一撃によってきよめられる必要があります。生活の土台がきよめられる時に、初めて正しい生活の構築が可能となるのです。

多くの信者は、新しい再出発を願い、困難な状態から抜け出すことを切望し、自分の将来に対する神のみこころを尋ね求めます。しかし彼らは、自分の過去を整理清算してはいないので。ただ過去のことを覆い隠したり、忘れ去ろうとすることに一生懸命で、神の戒めに照らしてみようとはしません。

明るみにさらされない罪は私たちの内面的な生活にとって、病気の巣窟のようなものです。そしてそこから、破壊的な影響が出てきます。多くの信者は過去の罪を弁明したり、覆い隠そうとしたり、忘れ去ろうとすることに全力を使って頑張りますが、それは決して成功することはありません。その結果は、まことの自由も得られず、生き生きとした証しをすることもできないのです。

本当に過去から解放され、自由になるためには、ただ一つの道だけがあります。自分の罪を主の前に言い表わし、罪の赦しのために流された主イエス様の血潮を感謝して受け取ることです。

私たちには主なる神の声を聞こうとする用意があるのでしようか。正直になろうとは思いませんか。私たちが、すべてを明るみに出し、全生涯を主に明け渡そうとしないなら、主は主のみこころを私たちに語ることはできません。つまり、自分を正当化したり、弁明したりすることをやめなければ、すべては無駄となります。

イエス様は、罪のゆえに人間を退けるといふことは一度もなさいませんでした。むしろ自分の罪を隠そうとしたり、自己正当化しようとしたりする者に対して、驚くべきほど厳しく「忌わしいものだ。」とおっしゃったのです。うわべだけつくろう見せかけの行ないこそ、主にもっとも忌み嫌われる偽善であり、傲慢です。

「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいになように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。」

(マタイ 23・25～28)

ダビデの心の態度は、私たちにも必要です。彼は次のように祈りました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください

い。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてくださ
い。
(詩篇 139・23、24)

けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。明らか
にされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ。
目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」

(エペソ 5・13、14)



4章 第一の戒め「ほかの神々があつてはならない」

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。」

(出エジプト 20・3)

第一の戒めから第四の戒めまで、これら四つの戒めは、全体として一つのものを形成しています。それは「人間と神との関係」です。そしてこれこそが、人生の土台です。人間は、本来神に依存する存在であり、神と正しい関係を持たなければなりません。このことは、強調しても強調しすぎることはない大切なことであり、これについて私たちは、はっきりとした認識を持つ必要があります。

人間と神との関係によって、人間のすべての生活、あらゆる行ない、あらゆる言葉、あらゆる考えが規定されます。どのような問題であっても、聖なる神のみこころになつた者として、神との正しい関係がなければ、問題は決して解決されません。

個人生活、市民生活、そして国民対国民の関係などすべては、神との正しい関係、神の戒めに基づいた関係にある時のみ、正しい状態に置かれるのです。

主がくだされた第一から第四の戒めは、全体として一つの大切な戒めにまとめられます。

「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」 (申命記 6・4、5)

この部分の後半節は、イエス様も、大切な第一の戒めとして示されました。(マタイ 22・37参照)

人間は、人間のために造られたのではなく、主なる神のため、主を愛するため、主に仕えるために造られました。これこそが人間のすばらしい使命です。

他のいかなる被造物からも、神は愛を要求なさいませんでした。創造主なる神が、被造物である私たちを服従させようとなさるなら、それは当然のことですが、主はそれよりも私たちの愛を望んでおられます。「あなたは神を愛するべきです。」これこそ私たちの心、たましい、気持ち、そして全存在に向けられた最大の戒めなのです。

主なる神は、私たちのまつたき愛、心からの愛を望んでおられます。主なる神の心は神の姿に似たものとして造られた被造物、人間の愛を望んでおられます。主なる神に対するすべてを投げ打った愛こそ、ほんとうの幸せ、まつたき満足、喜び、自由なのです。

私たちの主なる神への愛は、私たちの生活の土台、私たちの行為の推進力、そして私たちの行ないの目標となつていてでしょうか。私たちは、たとえ他の戒めを破らなかつたとしても、この最も大切な戒めを破つたことを認めざるをえません。主なる神の痛みは、私たちが全身全霊を持つて神を愛さないことであり、これこそが私たちのすべての悩みの原因であり、生けるまことの神に対する心からの献身が欠けるという結果をもたらすのです。少しばかり心を静め、神のことに耳を傾けましょう。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主であ

る。」

(出エジプト 20・2)

そこで、イエスは彼に言われた。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」
(マタイ 22・37)

私たちが愛し、ご自身を捧げてくださった主に対して、私たちは愛さないではいけないはず
です。

私たちが主なる神との正しい関係を持っているならば、私たちの全生涯は、神に対する礼拝そのものとなります。第一から第四までの四つの戒めは、人間の一生が、神に対するまことの礼拝であるべきだと言っています。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。」(出エジプト 20・3)という第一の戒めは、「礼拝の内容」を示し、「あなたは、自分のために、偶像を造つてはならない。」(出エジプト 20・4)という第二の戒めは、「礼拝のあり方」を特徴づけ、「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。」(出エジプト 20・7)という第三の戒めは「礼拝の危険」を警告します。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」(出エジプト 20・8)という第四の戒めは、「礼拝の特別の時」を定めます。

第一の戒めは、人間のもっとも深い内面をさぐり、まことの礼拝の内容を定めます。「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。あなたには、わ

たしのほかに、ほかの神々があつてはならない。」また、「わたしこそ、主である。わたしだけが主である。」

これこそ、すべてのまことの礼拝の土台です。ただひとり最高のお方の他に、別の存在を並べて考えることはできません。

イスラエルの民に対する神の厳しい教育の目標は、唯一の神への礼拝に、彼らを導くことでした。

「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。」

(申命記 6・4)

人間は誰でも「にせ者の神」を持ちたがります。つまりそれは、まことの神の代わりに、私たちの心を奪うほど魅力的な何かです。

人間がどのような神を信じるかということは、どうでもいいことはありません。人間が思いつくままに生み出した何百とある神々の中の一つの神を信じて、それはまったく意味がありません。聖書の中にご自身を啓示してくださった、「生けるまことの神」だけが、唯一まことの神でなければなりません。

主なる神は、ご自身を「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」、「イスラエルの聖なる者」、「主イエス・キリストの父なる神」、「唯一のまことの神」、「生けるまことの神」とおっしゃ

いました。

異邦人があがめる神々の名前は、決して聖書の神についての別の呼び名などではありません。別の名前とは、別の神々にほかなりません。

神ご自身は、ご自分のお名前に、言い表わすことのできないほど、大きな価値を置いておられます。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。…これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。」

(出エジプト 3・14、15)

「この光栄ある恐るべき御名」

(申命記 28・58)

ただひとりのまことの神が存在するように、まことの名前もただひとつだけ存在しています。

主は地のすべての王となられる。その日には、主はただひとり、御名もただ一つとなる。

(ゼカリヤ 14・9)

主なる神は、バアルと混同されることを決して望まれませんでした。主なる神は、イスラエルの民がバアルを礼拝することを拒まれました。そして主のしもべエリヤを遣わし、イスラエルの民が「まことの神」か、バアルかのどちらかをはっきりと選ぶように命じられたのです。

エリヤはみなの前に進み出て言った。「あなたがたは、いつまでどつちつかずによるめていているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。」

(1列王記 18・21)

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。」あなたはこの神の戒めを守つたのでしょうか。あなたの神はいつたい誰ですか。あなたの心は、何によつて奪われているのでしょうか。あなたの人生の内容は何でしょうか。

それはお金ですか。あなたの人生は、お金を追求することによつて特徴つけられるのでしょうか。あなたは貯めたお金で満たされているのでしょうか。それはいつべんにあなたの手元から無くなつてしまうこともありえます。あなたが世界一のお金持ちになつたとしたなら、それは生けるまことの神の代わりになりうるのでしょうか。

主イエスは、次のように言われました。

「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということではできません。」

(マタイ 6・24)

また今日、何と多くの人たちが、仕事の奴隷となり、がんじがらめにされてしまい、人生は仕事だ、と思ひ込んでいることでしょうか。心はからっぽでむなしく、家族は省みられず、子供たちは自分勝手な道を行つてしまい、すべては偶像である仕事の犠牲になってしまつています。そ

のような人生は、「砂上の楼閣」、つまり砂の上にお城を建てるようなもので、まったく基礎のない、むなししいものです。多くの人の人生は、次のようなものです。

あなたが叫ぶとき、あなたが集めたものどもに、あなたを救わせよ。風が、それらのみな運び去り、息がそれらを連れ去ってしまう。
(イザヤ 57・13)

またあなたの偶像は人間でしょうか。あなたの夫、妻、子供、友達、恋人、あるいは、あなたを導いてくれた人でしょうか。その人なしには、あなたは生きていくことができないような人、あなたの心を占めている人、あなたの「神」に相当する人がいるのでしょうか。もしいるとすれば、それはあなたの偶像です。あるいは、あなたは他の人から偶像にされることを良しとするのでしょうか。私たちは、神の代わりになろうと大胆な思いを持つならば、わざわい입니다。偶像崇拜は、もつとも恐ろしい罪であり、主なる神は、もつとも忌み嫌うものです。イスラエルの民の中で偶像崇拜を行ったり、させたりした人は、石で殺されなければなりませんでした。

あなたと母を同じくするあなたの兄弟、あるいはあなたの息子、娘、またはあなたの愛妻、またはあなたの無二の親友が、ひそかにあなたをそそのかして、「さあ、ほかの神々に仕えよう。」と言うかもしれない。これは、あなたも、あなたの先祖たちも知らなかつた神々で、地の果てから果てまで、あなたの近くにいる、あるいはあなたから遠く離れている、あなたがたの回りの国々の民の神である。あなたは、そういう者に同意したり、耳を貸したりしてはならない。このような者にあわれみをかけたり、同情したり、彼をかば

つたりしてはならない。必ず彼を殺さなければならぬ。彼を殺すには、まず、あなたが彼に手を下し、その後、民がみな、その手を下すようにしなさい。彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならぬ。彼は、エジプトの地、奴隸の家からあなたを連れ出したあなたの神、主から、あなたを迷い出させようとしたからである。イスラエルはみな、聞いて恐れ、重ねてこのような悪を、あなたがたのうちで行なわぬであらう。

(申命記 13・6～11)

また、多くの人々は、悪魔を自分の神としました。占いの師のところに行く人、口寄せのところに行く人、手相を見てもらう人、死んだ人の霊を呼び戻す霊媒者のところに行く人、こういう人たちは、自分の人生の支配権を悪魔に渡してしまい、悪魔の支配の下に陥ることになります。こういう人々は悪魔を恐れるようになり、したがってその人の将来は暗黒となります。

主は私たちに命令されました。「あなたには、わたし(主)のほかは、ほかの神々があつてはならない。」(出エジプト20・3)ですから、ただ単に、主の代わりにほかの神を拜んではならないというだけではなく、主のほかは、主と並んでほかの神を拜むようなことをしてはいけないのです。「神」||「何かほかのもの」は偶像礼拝です。主なる神は、あなたの心の中心に置かれる王座を、誰かといっしょに分けることなど決してお許しにならないのです。

自分の罪、過ち、妥協のすべてを主に申し上げ、告白し、全生涯の支配権を主に明け渡しなさい。おそらく聖書の中でも、一番後に書かれた書物のひとつと思われる第一ヨハネの手紙は、

非常に厳しい警告の言葉で終わっています。

子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。

(1ヨハネ 5・21)



5章

第二の戒め「偶像を造ってはならない」

「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。それらを拜んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」

(出エジプト 20・4～6)

この第二の戒めは、唯一の神がいらっしやることを前提条件としています。そしてこれは、主なる神を認識した人たち、神に仕えたいと思っている人たちに与えられたものです。この戒めは、生けるまことの永遠の神に対する礼拝の仕方について書かれています。

「わたしはあなたの神、主である。」「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。」まことの神に対する礼拝は、神の本質にふさわしいものでなければなりません。

主なる神は目に見えず、わたしたちの感覚でさわることができず、私たちのたましいで理解することができないお方です。ただ聖霊によって、主に生かされた人間の霊にだけ、ご自身を明らかにすることがおできになり、そうしたいと願っておられます。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

(ヨハネ 3・3)

いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。
(ヨハネ 1・18)

イエス様は、私たちにも理解できるような人間の形をとって、地上に下ってくださいました。ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。
(ヨハネ 1・14)

このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。
(1ヨハネ 1・2)

ただひとり、イエス様を通して、主なる神はご自身を現わしてくださいました。私たちは、イエス様を通して、「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われ」(ヘブル 1・3)を知ることができません。

第2コリント4章6節によって私たちの回心とは何であるかを見ることができません。

「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。
(2コリント 4・6)

イエス・キリストを通して、私たちは主なる神の本質と姿を知ることができます。しかし、神ご自身を見たり、つかんだり、把握したりすることはできません。ですから、神に対する私たちの礼拝もまた、霊によってされなければなりません。礼拝は、目に見える補助手段、感情的に動かされることや、感覚的なかたちによらず、霊によって行なわれるべきです。

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」

(ヨハネ 4・23、24)

「霊によって礼拝する」ということは、「神を目に見える形として現わしてその像に向かって拝む」こととはまったく正反対のものです。

偶像を造って礼拝することは、神の姿を、こっけいな形にしてしまうことです。生まれつき人間は、神に対する礼拝の補助手段として、何か目に見えるものを持ちたがります。人間とは、何かを見たり、感じたり、味わったり、聴いたりしたがるものです。そういった五感で感じられるものによって、何かを崇拜する気持ちや雰囲気を作り出し、それによって崇拜を維持したいと思うのです。

礼拝の対象として、直接目に見える、五感で感じられるようなものを持ちたいという気持ちから、多くのカトリック教会などに見られるような、装飾過多の教会、薄暗い堂内の神秘的雰囲気

気、ムードを高める典礼音楽、黄金の十字架やキリスト像、マリア像、聖者像などが作られてきました。こういったものは、確かに私たちの五感に訴えかけて情感を動かします。しかし、このような「もの」を、もし礼拝の「対象」とするならば、それは決して「霊によるまことの礼拝」ではなく、「たましいによる礼拝」となり、すべて偶像崇拜になつてしまいます。主なる神は、もともと目に見えず、形としてつかむことができません。ですから、その神を、具象物として感覚だけに頼って把握しようとすることはまちがいです。

見たり、聴いたり、実感したり、つまりいろいろな「もの」を通して礼拝するのではなく、そのようなものとは無関係に、「直接、神に対して礼拝する」ことこそが、まことの礼拝です。

まことの神に対して、正しいあり方で礼拝すべきであるという、第二の戒めは、非常に大切です。この大切さを強調するため、主はまちがった礼拝の結果と正しい礼拝の結果を次のように告げておられます。

「あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」
(出エジプト 20・5、6)

礼拝とは何でしょうか。「すべてのことを主のみこころのままにお委ねすること」です。「主の道に自分自身を委ねること」です。まことの礼拝とは、主のみもとにひれ伏すことです。

さて、ヨシユアがエリコの近くにいたとき、彼が目を上げて見ると、見よ、ひとりの人

が抜き身の剣を手持って、彼の前方に立っていた。ヨシユアはその人のところへ行つて、言った。「あなたは、私たちの味方ですか。それとも私たちの敵なのですか。」すると彼は言った。「いや、わたしは主の軍の将として、今、来たのだ。」そこで、ヨシユアは顔を地につけて伏し拝み、彼に言った。「わが主は、何をそのしもべに告げられるのですか。」

(ヨシユア 5・13、14)

ヨシユアは神の民イスラエルを、約束の地カナンに導き入れるという大きな使命を持っています。このことは、モーセが長年かかって成し遂げられなかったことでした。若いヨシユアにとっては、それはさらに困難だったに違いありません。これから攻めようとするカナンには、恐るべき強敵であるカナン人が待ち構えています。また、率いているイスラエルの民は、不平ばかり言っている始末におえない民でした。ヨシユアにとっては、まさに内外ともに困難な状態でした。ところがその時、主が現われたのです。ヨシユアは顔を地につけて伏し拝みました。ヨシユアは礼拝しました。

たとい、私たちの周りに強敵がひしめき、私たちには耐えられない苦しみが襲いかかり、また試みがやって来たとしても、その時、主に助けを叫び求めるだけでは十分ではありません。その時になすべき唯一のことは、主のみもとにひれ伏し、主を崇め、礼拝することです。もし、私たちが主のみもとにひれ伏し、礼拝するなら、私たちのまわりのすべての問題は小さなものになり、重荷から解放されます。礼拝とは、主のみもとにひれ伏すことです。まことの礼拝者は内面

的に自由になり、すべてを主に委ねることができますから、安心して将来に向かうことができます。



6章

第三の戒め「主の御名を、

みだりに唱えてはならない」

「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」
(出エジプト 20・7)

この第三の戒めは、「わたしは、あなたの神、主である。」という言葉と密接に結びついていす。神はご自身の御名を啓示してくださいました。ですから主は、「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。」と要求することがおできになるのです。

聖書の中における神の御名は、聖なる名前、すばらしい名前として、また神々しく力強く恐ろしい名前として示されています。

「わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにならぬことを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう。」
(エゼキエル 36・23)

主の聖なる名を誇りとせよ。
(詩篇 105・3)

私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょうか。あなたのご威光を天に置かれました。
(詩篇 8・1)

「わたしの名が諸国の民の間で、恐れられているからだ。」

(マラキ 1・14)

主の御名のうちに主のご臨在があります。ですから主の御名は主ご自身と同じように聖なるものです。主の御名は主の本質の現われであり、主ご自身の現われです。私たちは恐れをもって、聖なる神、主の前に身をかがめる時にだけ、あえて主の御名を呼ぶことが許されています。

イスラエルの民は、かつて異邦人の偶像崇拜に巻き込まれ、神の御名を汚しました。これこそ、イスラエルの民が70年間のバビロン捕囚を経験しなければならなかった原因でした。このときイスラエルは、神の御名が尊いことを学びました。バビロン捕囚から帰ってきたユダヤ人は、恐れから、もはや神の御名を軽々しく唱えたり、みだりに唱えたりすることをしなくなりました。

今日に至るまで、ユダヤ人は聖書を読む時でさえ、神の名を用いず、口にしないで、御名とか、彼とか、主ということばをその代わりに使っています。

主イエス様は、「(神の)御名があがられますように。」(マタイ 6・9)という願いと祈りを、私たちに教えてくださいました。「御名があがられますように。御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」これは、主のみこころです。

天においては、神と小羊の御名があがられています。ヨハネの黙示録を通して、私たちは、天において神の御名がいかにあがめられているかを見ることが出来ます。

この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、ことうのうのを聞いた。「ハレル

ヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。」

(黙示録 19・1)

神の御名には、すばらしい力が宿っています。主は、アロンと彼の息子たちに、イスラエルの子たちの上に守りとして、主の御名を置くことを命令しました。

「彼らがわたしの名でイスラエル人のために祈るなら、わたしは彼らを祝福しよう。」

(民数記 6・27)

この箇所は、原語を見ると「彼らがわたしの名をイスラエル人の上に置くなら、わたしは彼らを祝福しよう。」となっています。したがって、祝福するとは、主の御名を、誰かある人の上に置くことを意味します。主の御名の守りの下で安全にいることは、ちょうどひな鳥が親鳥の翼のかげで安全なことと同じです。ですから旧約聖書の信者は、神の御名による力をすでに知っていたのです。

たとえばダビデは主の御名に信頼して、あえてゴリヤテに挑戦しました。神の御名はダビデにとって、サウルやゴリヤテの武器よりもはるかに強い盾、また武器だったのです。

ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かつて来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。」

(1サムエル 17・45)

これはダビデの告白であり、勝利の秘訣だったので。

詩篇の作者は、証しています。

私たちは、あなたの勝利を喜び歌いましょう。私たちの神の御名により旗を高く掲げましょう。主があなたの願いのすべてを遂げさせてくださいますように。(詩篇 20・5)

へブル人への手紙の11章を見ると、多くの人が主の御名によって、大きな業を成したことがわかります。イエス様は特別の使命をもって、神の御名を告げ知らせるために地上に来られました。主イエス様は十字架につけられる前に、次のように言われました。

「わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみことばを守りました。」(ヨハネ 17・6)

主の御名は、イエス様を通して生きた目に見える現実のかたちとなったのです。

イエス様は、啓示された神の御名そのものです。罪の力からの贖い、悪魔の力からの解放をしてくださる最高の偉大な力は、イエス・キリストの御名のうちに宿っています。

それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。(ピリピ 2・9)

「すべての名にまさる名」こそ、主イエス様の御名であることがわかります。

「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

(使徒 4・12)

救いはイエス様の御名のうちにあります。主の弟子たちは、イエス様の御名の「生き生きと解き放つ」力を経験しました。彼らはあえて、次のように言うことができました。

「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」

(使徒 3・6)

その結果として、生まれつき足の動かない男は、おどりがつてまっすぐに立ち、歩き出ししました。

幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは、振り返ってその霊に、「イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け。」と言った。すると即座に、霊は出て行った。

(使徒 16・18)

このことがエペソに住むユダヤ人とギリシヤ人の全部に知れ渡ったので、みな恐れを感じて、主イエスの御名をあげるようになった。

(使徒 19・17)

弟子たちが行くところはどこでも、主の御名が大いにあがめられました。

私たちが信する者に与えられているのもっとも大きな特権は、「イエス・キリストの御名によって祈ること」です。それによって、主の救いと解放する力が明らかになるからです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。」

(ヨハネ 16・23)

そして第三の戒めは、私たちにとって非常に重大で神聖なものです。なぜなら、私たちはそのことによって、神の御名の偉大さを知ることができるからです。ですから、聖なる神の御名をみだりに唱えることは、恐ろしいことです。

「あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。」

(出エジプト 20・7)

この神の戒めを破った結果は、個人や家族の問題、国民生活の問題、さらには国と国の争いなどの形で現われてきます。

思い違いをしないけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。

(ガラテヤ 6・7)

「主よ。主よ。」と言つてもそれがまことの神である主でなければ、まったく意味がなく、かえつて罰せられることになります。キリスト者も自分の人生の支配権を明け渡さなければ、実を結ぶことはできません。主の御名もあがめられることはありません。そして、主の御名があがめられなければ、かえつて神の神聖さを損なうことになってしまいます。

「神の名は、あなたがたのゆえに、異邦人の中でけがされている。」と書いてあるとおりです。
(ローマ 2・24)

このことは、多くの信者にもあてはまります。

「主よ。主よ。」と言いながら、自分勝手なことをすれば主の御名が損なわれ、けがされます。そうすると、未信者は信者を通してイエス・キリストのもとに引き寄せられるのではなく、反対にイエス・キリストから引き離されてしまいます。

さらに主なる神に対する恐れを失い、主なる神に対してなれなれしい態度を取ることまた、信者にとつての大きな危険です。

「わたしが目を留める者は、へりくだつて心碎かれ、わたしのことばにおののく者だ。」

(イザヤ 66・2)

主を恐れないことは、多くの場合、敗北の原因となります。ウザは主を恐れなかつたために死

ななければなりませんでした。

こうして彼らがキドンの打ち場まで来たとき、ウザは手を伸ばして、箱を押えた。牛がそれをひっくり返しそうになったからである。すると、主の怒りがウザに向かって燃え上がり、彼を打った。彼が手を箱に伸べたからである。彼はその場で神の前に死んだ。

(1歴代誌 13・9、10)

私たちが主の御名をあがめるように、主が「主の恐れ」を私たちに教えてくださるように、主に祈りましょう。

主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。
(詩篇 86・11)

その日、あなたがたは言う。「主に感謝せよ。その御名を呼び求めよ。そのみわざを、国々の民の中に知らせよ。御名があがめられていることを語り告げよ。主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを、全世界に知らせよ。」
(イザヤ 12・4、5)

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議な計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。

(イザヤ 25・1)

「わたしは主、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。」…わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。彫像に拠り頼み、鑄像に、「あなたがたこそ、私たちの神々。」と言う者は、退けられて、恥を見る。

(イザヤ 42・8、16、17)

あなたがたのうち、だれが主を恐れ、そのしもべの声に聞き従うのか。暗やみの中を歩き、光を持たない者は、主の御名に信頼し、自分の神に拠り頼め。

(イザヤ 50・10)

「地を造られた主、それを形造つて確立させた主、その名は主である方がこう仰せられる。わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、あなたに告げよう。」

(エレミヤ 33・2、3)

「主よ。私は深い穴から御名を呼びました。あなたは私の声を聞かれました。救いを求める私の叫びに耳を閉じないでください。私があるに呼ばわるとき、あなたは近づいて、『恐れるな。』と仰せられました。」

(哀歌 3・55～57)

「わたしは、わたしの聖なる名をわたしの民イスラエルの中に知らせ、二度とわたしの聖なる名を汚させない。諸国の民は、わたしが主であり、イスラエルの聖なる者であることを知ろう。今、それは来、それは成就する。―神である主の御告げ。―それは、わたしが語った日である。」

(エゼキエル 39・7、8)

あなたがたは飽きるほど食べて満足し、あなたがたに不思議なことをしてください。あなたがたの神、主の名をほめたたえよう。わたしの民は永遠に恥を見ることはない。しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。主が仰せられたように、シオンの山、エルサレムに、のがれる者があるからだ。その生き残った者のうちに、主が呼ばれる者がいる。

(ヨエル 2・26、32)

「もし、あなたがたが聞き入れず、もし、わたしの名に栄光を帰することを心に留めないなら、―万軍の主は仰せられる。―わたしは、あなたがたの中のろいを送り、あなたがたへの祝福をのろいに変える。もう、それをのろいに変えている。あなたがたが、これを心に留めないからだ。」

(マラキ 2・2)

「しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。」

(マラキ 4・2)



7章

第四の戒め「安息日を聖なる日とせよ。

仕事をしてはならない」

安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。—それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。(出エジプト 20・8～11)

第四の戒めは、ただ単に安息日や主の一日についてだけではなく、一週間の中をどのように過ごすかについて語っています。「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしなければならない」と命令されています。

この戒めにおいては主なる神に対する人間の基本関係が定められています。「わたしは、あなたの神、主である。」「あなたは…しなければならぬ。」と。

主なる神は創造主として、また人間に対する支配者としてお語りになり、人間の生活を定められます。主は人間の労働時間と休息時間とを次のように規定されたのです。

「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならぬ。」これは神の命令です。この神の戒めを通して、私たちの生活は聖められるのです。人間は主なる神への従順な関係に立つと

き、毎日の仕事を喜んで行なうようになります。毎日の仕事は神の戒めによってきよめられ、主なる神に対するご奉仕になります。

最も小さな、あるいは最も単純な、あるいは最も困難な仕事がこのようにして神との直接の関係にもたらされるとは、何とすばらしいことでしょうか。労働はただ単に神の戒めだけではなく、神の賜物となります。自分の仕事を人間に対する奉仕としてではなく、主なる神に対する奉仕とみなすとき、多くの人間はどれほど満足し、幸せでありましょう。

毎日の仕事は神の戒めによって聖められるならば、多くの社会的、政治的問題は解決されるでしょう。

今日、人々は「永遠の救い」を忘れてしまうほど忙しく働いています。また多くの人は働かなくてもいい人をうらやましく思います。このようにして人間の人生は空しいものとなります。しかし労働が主なる神に対する聖なる奉仕であるとき、事情はまったく違ったものになります。

主なる神は一週間の一日を安息日と定め、それを守るように命令なさいました。神ご自身が六日間は天と地を創造され、七日目にお休みになったから、人間もそのようにすべきであると定められたのです。

なぜ主なる神はお休みになったのでしょうか。それは神が休息を必要としたからではなく、天と地を完成なされた後には、もはや何もする必要がなかったからです。神の休息はすべてが完成されたことの表現です。

こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。それで神は、第七日目に、なごつ

ていたわぎの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわぎを休まれた。神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。

(創世記 2・1～3)

したがって七日目の日は、創造が完成された大いなる日、創造主の安息日、主なる神の誉れと栄光の日です。主はすべての被造物が主の休息の日を守り、それによって創造主を敬うことを望んでおられます。最初の人間は、六日目に創造されました。したがって、最初の人間がこの地上で経験した最初の日は、神の安息日でした。人間の生活が休息の日から始まるとはなんとすばらしいことでしょうか。

神の七番目の日は、人間の最初の日でした。神はまず最初にお働きになり、すべてのわぎが完成された後でお休みになりました。人間はまずはじめに休息し、それからエデンの園で神によって定められた課題を行ないました。

また、主なる神は、それよりもさらに偉大なみわぎを成就なさいました。すなわち十字架につかれたお方主イエス・キリストを通して、全人類を悪魔と死の力から、そしてまた罪の力から贖ってくださったという事実です。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。

(1ペテロ 2・24)

この地上でなされたもつとも困難な仕事がそれでした。

「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上でああなたの栄光を現わしました。」
(ヨハネ 17・4)

「完了した。」と主イエス様は叫ばれました。私たち全人類の贖いのために成されるべきことはもはや何一つありません。私たちは贖われたのです。主イエス様はみわざを成し遂げられた後、御座にお着きになりました。

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。
(ヘブル 1・3)

主の救いのみわざは完成されました。主イエス様はそれに何一つ付け加えるものをお残しになりませんでした。ですから主イエス様は、みわざが完成された証拠として休息なさるのです。

主イエス様はまず初めにお働きになり、それから休息にはいられました。主がよみがえられた日に、すなわち週の初めの日は、主の勝利の日です。主なる神は、御子イエス様を死者の中からよみがえらせたとき、贖いのみわざを証明なさいました。主イエス様が勝利されたので、私たちは休息に入る道が与えられました。

自分自身の義を追求することに疲れ果ててしまった人、また自分の罪の状態から逃れようと一

生懸命に努力した結果、敗北してしまった人は、主イエスの招きに従います。

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。」
(マタイ 11・28)

この招きに従った人について、ヘブル人への手紙には次のように述べています。

信じた私たちは安息にはいるのです。
(ヘブル 4・3)

新しく生まれた人間は、主イエス様の安息にはいります。その新しい生活の最初の日は、「ご自分のわざを終えて休まれた」ことによって、特徴づけられています。

神の安息にはいった者ならば、神がご自分のわざを終えて休まれたように、自分のわざを終えて休んだはずです。
(ヘブル 4・10)

主の安息から、新しく生まれた人間は、新しい仕事に向かいます。それは罪の贖いを求める自己の戦いとはまったく違ったもので、主なる神に対する感謝と奉仕の仕事です。

主イエス様はまず初めにお働きになり、それからお休みになりました。主のみもとに来て新しく生まれ変わった人は、まず初めに休息し、それから働きます。

一週間のうちの安息の日は、主なる神が私たちの造り主であること、そしてイエス・キリストによる私たちの贖い主であることを、繰り返し私たちに思い起こさせる日です。私たちに安息日

が与えられたのは、私たちが主の御名を誉めたたえるためです。

「あなたはイスラエル人に告げて言え。あなたがたは、必ずわたしの安息を守らなければならない。これは、代々にわたり、わたしとあなたがたとの間のしるし、わたしがあなたがたを聖別する主であることを、あなたがたが知るためのものなのである。これは、あなたがたにとって聖なるものであるから、あなたがたはこの安息を守らなければならない。これを汚す者は必ず殺されなければならない。この安息中に仕事をする者は、だれでも、その民から断ち切られる。」

(出エジプト 31・13、14)

安息の日は、主が「私たちが聖別する主」であることの「しるし」として、私たちに与えられています。したがって私たちは安息日を通して、主おひとりだけが創造し、贖い、聖別することがおできになるということをはっきりと認めることができます。

安息日とは休息ということであり、土曜日などではありません。旧約聖書においては、イスラエルの民は来るべき贖い主を待ち望み、「約束された安息」を期待したのです。ですから彼らは七日目を安息日として祝いました。

しかし私たちは十字架のみわざが成された後の時代に生きています。約束された贖い主、イエス・キリストはすでにおいでになったのであり、救いのみわざを完成なさったのです。私たちはイエス・キリストによって成就された救いを振り返ってみています。ですから私たちは週の最初の日を、「完成された安息日」すなわち休息の日として祝います。

週の七日目を「約束された安息日」として祝う者は、七日目をそのような意味で祝う今日のイスラエルの民と同じことになります。イスラエルの民族は未だに贖い主の到来を待ち望んでいるからです。私たちはそうではなく、贖い主がすでにおいでになったことを喜び、贖いのみわざが完成されたことを誉めたたえます。私たちは週の初めの日、すなわち日曜日を「主にある安息のしるし」として祝うのです。

祭司職が変われば、律法も必ず変わらなければなりません。…（ヘブル 7・12）

聖書にあるとおり、確かに祭司職は変わりました。もはや人間ではなく、御子イエス・キリストが大祭司になりました。それゆえに安息日もまた新しく大祭司とされた御子イエス・キリストを中心に定められなければなりません。すなわち私たちは週の七日目ではなく、主がよみがえられた日、すなわち週の最初の日を安息日として祝うのです。

しかし私たちは本当にその日を祝っているのでしょうか。ある人はもはや神の戒めから解放されているのだから安息日を守る必要がないと考えています。しかしそれは結局、私たちが聖別された主が私たちに与えてくださった「幸いなしるし」を捨てることになります。

旧約聖書の信者たちは来るべき贖い主を待ち望んで、安息日を守っていたのです。ましてや私たちはすでに成就された贖いのみわざを覚えるため、贖い主イエス・キリストを誉めたたえざるをえません。

主なる神は安息日を非常に大切にしてくださいます。そして私たちが主なる神を礼拝するため

の時を持つことができるようにと配慮してください。家族も主のものであり、仕事もまた主からいただいたものです。主が私たちのためにすべてのことをしてくださったことについて気がつくはずです。

今日、日曜日は私たちにとってどのような意味を持っているでしょうか。大部分の人にとって日曜日はまったく聖なる性質を失ってしまっているのではないのでしょうか。多くの場合、日曜日はレクリエーションや遠足、また家でごろごろしている日になってしまっているようですが、それはけっして「主の日」にふさわしいことではありません。また多くの人々は、日曜日がその他の六日間の労働日と同じように、主なる神が定められたことを忘れてしまっています。その人たちは、自分勝手なことをするために日曜日があると思っています。神の目から見ると享楽と快楽のために使われる日曜日は、汚れた罪深いものです。

特別に主にささげられたものであるべきはずの日曜日は、楽しみやスポーツ、さらには罪や汚れの日になってしまっています。楽しみの日は、その前の日の晩、すなわち土曜日の夜から始まります。それもまた道徳的に墮落した人間を現わす証拠です。

今日、この世の支配者は悪魔です。日曜日は人間が悪魔に仕える日になってしまっていることは明らかです。

あなたを聖別する日としての安息日を覚えましょう。

人間は労働時間の中断として日曜日を用いるように創られています。この第四の戒めを守らないことは個人生活、家族生活、国民生活にとって恐るべき深刻な結果をもたらします。精神的に

患う人々の数は今日、今までになかったほどの数に上っています。そしてまた倫理的道德的な乱れに関しても、多くの場合、日曜日を正しく守らなかつたことにその原因を見出すことができます。あなたは安息日を聖なる日とすべきです。あなたの神である主に日曜日の時間と空間をささげましょう。主を覚えましょう。あなたの神である主を喜び、賛美し、主に仕えることこそ、日曜日をほんとうに聖別することです。

主のみことばを読み、主のみことばに耳を傾け、主のみことばを告げ知らせるために、日曜日には私たちに与えられています。主イエス様を愛し、信じる者が誰でもみな、日曜日ごとに主のみことばに耳を傾け、宣べ伝えるならば、この地上はもつと変わったものになっていくでしょう。

一生涯における日曜日というものは、その人にとって大変大きな財産であり、そしてまた同時に大きな責任を伴ったものであると言えましょう。たとえば70歳になった人は、それまでの人生において10年間に等しい日曜日を持ったことになるわけです。

あなたはおいくつですか。あなたはすでに何年間分の日曜日を持ったことになるのでしょうか。そしてあなたはそれをどのように用いたのでしょうか。誰一人として主の御座の前で言い訳をすることはできません。

「私たちにはそのための時間がありませんでした。」と言うのが、神のみことばを避けたい現代人の言い訳ですが、それは主のみ前に何の言い訳にもなりません。

あなたは日曜日を経験したのですから、自分のたましいの救いのための時間を持っていたはずです。今まで過ごした日曜日は、無駄な時間になっていたかもしれません。そうだとすれば、今

日、あなたの主なるイエス様のみもとに行き、そのことを主に言い表わしてください。

あなたの全生涯を主のみ手に明け渡し、主の日を正しく整えていただいてください。そうすれば日曜日はほんとうにあなたにとって、一週間のうちでもっとも素晴らしい日、神のみに喜びの日となります。

「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」(出エジプト 20・8)という第四の戒めは、礼拝の特別の時を定めます。

礼拝とは何でしょうか。すべてのことを主のみこころのままにお委ねすること、主のみもとにひれ伏すこと、そして自分のもっとも愛するものを主にささげることです。

サムエルという預言者の母親のハンナを例にとつて見てみましょう。

ハンナは主なる神の前にちかづき、「万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主におささげします。」(1サムエル 1・11)と祈りました。主はその祈りを聞き届けてくださり、ひとりの子をお与えになったのです。しかしハンナは与えられたその子を主にお返ししました。ハンナの願いの頂点は子どもでした。しかしハンナはその子が主より与えられるや、その子を主にお返ししました。

「この子のために、私は祈ったのです。主は私がお願ひしたとおり、私の願ひをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を主にお渡しいたします。この子は一生涯、主に渡されたものです。」こうして彼らはそこで主を礼拝した。

このように言える人は、主をまことに礼拝する礼拝者です。主なる神に自分のもつとも愛するものをささげることが知らない人は、まことの礼拝を知らない人ではないでしょうか。私たちはハンナのように私たちのサムエルを、もつとも愛するものを主にささげることができるでしょうか。もしささげることができれば、礼拝とは何か、というその意味を知ることができます。礼拝とはおのれのもつとも愛するものを主にささげることです。

最後にあの偉大なる信仰の父、アブラハムに目を留めてみましょう。

アブラハムは主の道を歩いたから、まことの礼拝者となりました。神の道を歩むために、彼は非常に苦しい別れをしなければなりませんでした。肉的にはハガルとイシユマエルと別れなければならず、霊的には口トとソドムから分離しなければならず、また、愛するひとり子イサクとも別れなければなりませんでした。

神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

(創世記 22・2)

アブラハムはこの神のみことばに対して、「主よ、なぜですか。なぜイサクを殺さねばならないのですか。もしイサクが死んだらあなたの約束は反故になり、何の価値もなくなるではありませんか。」

ませんか。」と言ってつぶやくことを決してしませんでした。

アブラハムは次のことを確信していました。主なる神の道に自分のすべてをささげることによつてのみ、神を礼拝することができるとのことだ。ですから信仰の父であるアブラハムはその若い者たちに、「あなたがたは、ろばといつしよに、ここに残つていなさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻つて来る。」（創世記 22・5）と言つたのです。アブラハムは若い者たちに「私はモリヤの山でわが子イサクを殺す。」とは言いませんでした。なぜかという、もつとも愛するものをささげることは、とりもなおさず、礼拝を意味しているからです。すべてを主にささげることが、まことの礼拝です。犠牲のあるところには必ず祭壇が築かれます。祭壇の築かれているところには必ず礼拝があります。このことを静かに思い巡らすなら、私たちにとって主イエス様の十字架が日々だけ大切なものであるかが深く、深く知らされてくると信じます。礼拝は自分のもつとも愛するものを主にささげることです。

「しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによつて父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによつて礼拝しなければなりません。」

(ヨハネ 4・23、24)

肉は神の道におのれを委ねることをしません。肉は神のみもとにひれ伏し、拝することをしません。肉はおのれのもつとも愛するものを主にささげることをしません。ドイツには「肉ではな

く、肉ではなく、霊だけが私たちの支配者であるように」という歌があります。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。(1ペテロ 2・24)

「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。」

(ヨハネ 17・4)



8章

第五の戒め「あなたの父と母を敬え」

「あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齡が長くなるためである。」
(出エジプト 20・12)

聖書のみことばには、特別に貴い価値があり、ひととき強い光を放っている「神の宝石」とでも言うべき箇所があります。そしてその「みことばの宝石」は決して古びず、永遠に輝き続けます。

「モーセの十戒」、神の聖なるみこころを反映する十のみことばは、そのような「神の宝石」です。十戒は何世代にもわたり、変わることはない十の光を持ち続けています。それは決して古くならず、神の永遠のいのちの息吹を吹きこまれています。ですから主は、自分の民であるイスラエルが常に戒めのみことばを忠実に守ることを強く要求なさったのです。

私がいよいよ、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。
(申命記 6・6～9)

これらのみことばは、私たちのうちに深く刻み込まれています。それらは私たちの前にある石

の板とか、物の上だけでなく、私たちの心の中に刻み込まれているのです。誰でもこれらの神の戒めを知っています。まことの神を信じる者にとって、次のみことばは、まさにぴたりと当てはまります。

「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。」

(エレミヤ 31・33)

主なる神の戒めに関わる問題は、「まことの神を愛するか、愛さないか」という問題です。もしも神を愛するならば、神を喜ばせたいと思い、また神の言われることをすべて守りたいと思はずです。今まで見てきたように、第一の戒めから第四の戒めまでは、主なる神と自分との個人的な関係が中心でした。しかし、第五の戒めからは、自分と周囲の関係が中心になります。つまり、私たちは周囲の人々に対して、どのように振舞い行動するかという問題です。

したがって、第五番目の戒めから始まる神の戒めは、第一から第四までの戒めより、私たち人間にとってわかりやすいものとなっています。私たちの日常生活、目に見えるもの、試練、決断など、誰でもよく知っている事柄が問題となっているからです。これらの戒めの正しさは、誰一人反論する余地のないものであり、戒めを破った人々にも、反論できないほど明らかなものだからです。第五から第十までの戒めは、どの国においても何らかの形で憲法の土台となっています。これらの戒めが無視されると、家族においても、国家においても、人間が共同生活をおくることは不可能となり、人類は没落してしまいます。今日私たちは、確かに神の戒めを無視するこ

とが死を意味することを見えていますし、主が第五の戒めに続いて付け加えられることもよく理解することができます。主が付け加えられたのは、「あなたの齢が長くなるため」ということです。主なる神の戒めを守ることは、個人個人にとって、また人間共同生活にとって、民族にとって、「いのち」を意味します。この不動の原則は次の通りです。

「あなたがたは、わたしのおきてとわたしの定めを守りなさい。それを行なう人は、それによって生きる。わたしは主である。」

(レビ記 18・5)

これは、あなたがたにとって、むなしいことではなく、あなたがたのいのちであるからだ。

(申命記 32・47)

主なる神は、十戒の中の第五の戒めから始まる掟を、ひとつの掟にまとめておられます。

「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」

(レビ記 19・18)

心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

(申命記 6・5)

主イエス様もまた、この戒めをもっとも大切な戒めとして次のように言われました。

「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」そこで、イエスは彼に言われた。

『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。律法全体と預言者たちが、この二つの戒めにかかっているのです。」

(マタイ 22・36～40)

したがって上に述べた二つの戒めのあいだには、きわめて密接な関係があります。「私たちと神との関係」、そして「私たちと他の人々との関係」。この二つは、内面的に関連しています。

したがって次のように言うことができます。主なる神を愛する者は隣人をも愛します。そして主を愛すれば愛するほど、いっそう隣人を愛するようになります。逆のことも言えます。隣人を愛することができなければ、神をも愛することができません。したがって私たちの隣人に対する関係は、私たちと神との関係を、この地上で公に表わすこととなります。ヨハネが次のように言うとき、それは私たちに厳しい事実を示しています。

神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。

(1ヨハネ 4・20、21)

もしも、他の人々との関係が正しくないなら、私たちはまず、神との関係を正しく整えなければ

ばなりません。そうすれば、他の人々との関係も変わるはずです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」と主なる神は私たちに要求しておられます。

しかし、私たち人間の「生まれつきの性質」は、「自分自身だけを大切にせよ。」です。現代人は自分だけを大切にしようとし、その結果、孤独になり、不幸になり、いろいろな問題を引き起こし、あらゆる摩擦や戦争の原因になります。主イエス様の性質は、それらとはまったく違うものです。

「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていない。」
（ヨハネ 15・13）

誰にも迷惑をかけなかったからとしても、神の戒めを守ったことにはなりません。他の人をほんの少し愛したとしても、神の戒めを守ったことにはなりません。誰かを憎んでいないというだけでは、決して十分とは言えず、もつと積極的に他の人を愛するように、と主は要求しておられるのです。

私たちが犯した罪よりも怠慢の罪の方がはるかに大きな負いめではないでしょうか。ここでよく考えていただきたいのは、私たちの家族に対する「愛の怠慢という罪」のことです。あなたの夫、妻、子どもは、あなたの愛を十分に得ているでしょうか。また、あなたの従業員や部下に対する愛の怠慢もないでしょうか。あなたの従業員や部下が、あなたに愛を求めたにもかかわらず、得られなかったというようなことはないでしょうか。彼らは働くための理性と知恵を持って

いるだけではなく、愛される心をも持っているのです。

また、滅びゆく多くのたましいに対しての愛の怠慢は、なかったでしょうか。しばしば私たちはあきらめたり、腹を立てたりしてしまうようなことがなかったでしょうか。もし私たちがもっと愛することができたなら、その人たちの心は開いたことでしょうか。

また、苦しんでいる人、悩んでいる人、絶望している人、弱い人、まちがった道に入ってしまった人たちに対して、私たちはあまりにも早く判断を下してしまい、ほんとうの愛はひとつもなかったのではないのでしょうか。このような愛の怠慢が主の前にすべて明らかにされるなら、私たちはただ主の前に恥じ入るばかりです。

主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。

(詩篇 130・3)

前に述べたように、第五の戒めは人と人の関係にかかわる最初の戒めです。そして、その戒めは、まず親子の関係について語られています。両親は子どもにとって、まず最初に目に入ってくる存在であり、親子は、生涯にわたって特に縁の深い関係にあります。

私たちは人生を、両親によって与えられています。ですから、親に対する愛は、他の人に対する愛よりも大切にされなければなりません。両親は子どもにとって神に次ぐ存在です。主なる神が人間のために、何をしてあげたいと思っておられるかは、親が子に対して何をしてあげたいか、を知ることによってよくわかります。

両親は幼子にとってすべてのすべてです。親は子どものために全責任を負い、心配し、導き、守り、必要なものをすべて与えます。両親を大切にすることは、つまりは主なる神を大切にすることです。

親の立場は、その親の道徳的な価値には関係なく、神によって聖別されています。親である以上、父と母とを「敬う」べきです。これは神の動かすことのできない戒めです。

この戒めには、年齢の制限がありません。この戒めは親が生きている限り当てはまります。現在のヨーロッパで悲劇的なことは、子どもが20歳になると、親の言うことを聞かず、自分勝手なことをすることです。この「敬う」ということは言葉と行ないで「敬う」ことです。もちろん「敬う」といっても、子どもの年齢に応じて、いろいろな違った敬い方があります。未成年の子どもは、絶対服従という形で両親を敬います。それは神の聖なるみこころであり、神の教育の土台です。

わが子よ。あなたの父の訓戒に聞き従え。あなたの母の教えを捨ててはならない。それらは、あなたの頭の麗しい花輪、あなたの首飾りである。(箴言 1・8、9)

子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。(コロサイ 3・20)

旧約時代には、わがままで不従順な息子は死刑に処せられました。

かたくなで、逆らう子がおり、父の言うことも、母の言うことも聞かず、父母に懲らしめられても、父母に従わないときは、その父と母は、彼を捕え、町の門にいる町の長老たちのところへその子を連れて行き、町の長老たちに、「私たちのこの息子は、かたくなで、逆らいます。私たちの言うことを聞きません。放蕩して、大酒飲みです。」と言いなさい。町の人はみな、彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならぬ。あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。イスラエルがみな、聞いて恐れるために。

(申命記 21・18～21)

自分の父をあざけり、母への従順をさげすむ目は、谷の鳥にめぐりとられ、わしの子に食われる。

(箴言 30・17)

神のみことばである聖書は、両親と教育者のうえになんという大きな責任を置いていることでしよう。未成年の子どもは親に対して絶対服従を要求されるように、親たちもまた、この戒めを守らせることを義務づけられています。

主イエスはこの地上に幼子としてお生まれになりました。主イエス様は生涯この第五の戒めを守られ、父と母とを敬まわれました。

それからイエスは、いつしよに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

(ルカ 2・51)

今日私たちはそのような考え方からどれほど遠ざかってしまったことでしょうか。現代社会では子どもの教育に関して、「絶対服従を子どもに要求することは、子どもの自由を束縛することだ」とみなされています。このような教育の結果、今日の親は、「子どもに従う」ようになってしまっています。

また、子どもたちは、健全な発育のための土台が欠けているので、肉体的にも精神的にも病気になるってしまっています。今日精神病院には、驚くほどの多くの若者が入院しています。彼らは人生に挫折してしまっています。その多くの原因は、両親に対する服従の態度が欠けていたことに端を発しています。両親に対する服従がなくなっていくということは、末の世の特徴です。

終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、…になり…。

(2テモテ 3・1、2)

現代の人々は、主なる神の戒めからどれほど離れてしまっていることでしょうか。人間が神の聖なるみこころを軽く考えたため、若者たちは墮落してしまつたのです。従順こそ未成年の子どもにふさわしいものです。大人になつた子どもは、自分自身で決断することを学ばなければなりません。しかし両親を敬うという戒めからは解放されていません。成長した子どもは、尊敬と愛に満ちた配慮によって、両親を敬うべきです。

年老いた父親に対する親孝行ほど美しいものではありません。弱って体が不自由になった母親に対する娘の配慮ほど美しいものではありません。それによって与えられる祝福は、地上のいかなるものよりも尊いものです。

主イエスは、パリサイ人たちが自分勝手につくった人間的な掟とは異なり、両親に対する配慮こそ主に対するささげ物に勝るといふことを強調しました。

「モーセは、『あなたの父と母を敬え。』また『父や母をののしる者は、死刑に処せられる。』と言っています。それなのに、あなたがたは、もし人が父や母に向かつて、私からあなたのために上げられる物は、コルバン（すなわち、ささげ物）になりました、と言えば、その人には、父や母のために、もはや何もさせないようにしています。」

(マルコ 7・10～12)

大人になられた主イエスは、母親を常に思い、模範的に取り扱われました。十字架につかれた最後の時にも、主イエスは母親を愛し、弟子のヨハネに母親の将来のことを頼みました。

イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます。」と言われた。それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます。」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。

(ヨハネ 19・26、27)

今日、何という多くの問題が家庭の中にあることでしょうか。男の子は父親の權威に逆らい、女の子は家のことを顧みず、てんでに自分勝手な道に走っています。今日の若者の特徴は、親に対して、愛も尊敬もなく、悪口を言うことです。

何と多くの母親が心を傷つけられ、何と多くの父親は息子や娘に絶望していることでしょうか。何と多くの親が子どものために苦しい涙を流していることでしょうか。

この第五の戒めには、当然ながら義理の両親も含まれています。「あなたは義理の父、および母を敬いなさい」と。この戒めを守るなら、多くの家族は変えられることでしょうか。

もしかするとあなたは、自分の父親が尊敬に値しない、また自分の母親が愛するに値しない、と言わざるをえない状況に置かれているかもしれません。しかしそうだとしても、「あなたの父と母を敬え。」という神の戒めから解放されることはありません。

両親がたとえどのような人であっても、神に代わるものである以上、ただそれゆえに、あなたは父と母を敬わなければなりません。両親を敬う者は神を敬います。あなたは両親がどのような状態にあったとしても、主のゆえに、敬い愛しなさい。

聖なる神のみこころを行なうために、両親を敬いましょう。主は両親が導かれ、祝福されるために、あなたを用いられるかもしれません。何と多くの両親は子どもを通して永遠の救いにあずかるようになったことでしょうか。

あなたには、まだ両親がいらっしゃるのでしょうか。ご両親はあなたを見て、喜んでおられるのでしょうか。あなたのことを思うと両親の目は輝くのでしょうか。あるいはあなたのことを思つて涙

を流すでしょうか。

愛すれば愛するほど、両親の年月はさらに豊かなすばらしいものになります。多くの人は両親が死んでから、どうしてもっと多くのことをしてあげなかつたのかと後悔します。「自分自身と同じように父と母を愛せよ。」これこそ、すべての人に向けられた神の戒めです。



9章

第六の戒め「殺してはならない」

「殺してはならない。」

(出エジプト 20・13)

モーセの十戒のそれぞれの戒めは、「わたしは、あなたの神、主である。」という前書きと大前提に基づいています。私たちの隣人との関係について定められた第六番目の戒めとその後が続く戒めにおいては、特にそのことを覚えていただきたいと思えます。

人間ひとりひとは、主なる神の前に立ちます。生けるまことの神のみこころによって、私たちの人生は形造られるべきです。「すべてのいのちはわたしのものであるから、あなたは殺してはならない。」私たちの神である主は、このように私たちに語っておられます。

主なる神は造り主ですから、「すべてのいのちの主」です。ただ主おひとりだけがいのちを与えることがおできになります。なぜなら、ヨハネの福音書の5章26節にあるとおり、父なる神はご自身のうちにいのちを持っておられるからです。

「それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようになさってくださいましたからです。」
(ヨハネ 5・26)

すべてのいのちは、主なる神の持ちものです。したがって、いのちを奪うことは神の所有物を奪うこととなります。創造主を敬う者は、主がお与えになつたいのちを尊ばなければなりません。主なる神は人間を神ご自身の姿に似たものとして、お造りになりました。墮落した人間の中

には、「神に似た姿」はほとんど見られないかもしれませんが、しかしまだ現存しているのです。

主なる神は、ただ単に人間の創造主であるだけではなく、人間のさばき主でもあります。「罪から来る報酬は死です。」(ローマ 6・23)と、神は人間にあらかじめ、はっきりと告げておられます。裁判官である主だけが罪の罰としての死刑を執行する権利を持っておられるのです。人間そのものは、自分自身の権威で裁判官となり、人のいのちを奪う権利を持っていません。権利がないのに殺すことは殺人罪です。

主なる神は主であり、創造主であり、さばき主であり、そしてまた贖い主です。主が人間にお与えになっておられるいのちは、「恵みの時」であり、また永遠の天の御国におけるいのちへと続きます。ただ主おひとりが完全な知恵において、ひとりひとりの人間の寿命、その人に対する「恵みの時」を決定なさいます。この事実はなんと深淵なことでしょう。ですから、ひとりの人間のいのちを奪う者は、「恵みの時」を短くし、主のご意志に対して重大な責任を負うことになります。

ひとりの人間のいのちは、第六の戒めによって火の壁で囲まれています。創造主の許可なしに、人間のいのちを奪うことは許されていません。人間の背後には、いのちを守る創造主が立っておられます。したがってこの地上に住むすべての、あらゆる人間のいのちは同じように尊く、創造主のゆえに尊敬されなければなりません。

ただひとり、主なる神ご自身だけが、他の者のいのちを別の者の手に委ねることがおできにな

ります。このようにして創造主は、たとえばノアの洪水の後にあらゆる動物のいのちを人間の手にお与えになりました。その時までには肉を食べなかつた人間が、それからは動物のいのちを奪う権利を与えられました。

私たちはしたがって、動物の生死を自由にできる権利をもっているわけですが、しかし、この権利をどのように実行するかについては、主なる神に対して責任を負っています。動物をいじめ殺すことは人間の権利の乱用であり、許されていません。

野の獣、空の鳥、—地の上を動くすべてのもの—それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておののこう。わたしはこれらをあなたがたにゆだねている。生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。

(創世記 9・2、3)

いのちの主である神は、意識して殺人を犯した者に対して死刑をくだされました。これはノアの洪水の後に共同生活の土台として、人間に与えられた最初の律法でした。

わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。

(創世記 9・5、6)

このことは、殺すことを命令しています。人のいのちを奪う殺人者は神のみこころによって殺されるべきです。このことは第六の戒めに反するのではなく、反対に第六の戒めを証明するものです。いのちが大切にされるため、人を殺す者は殺されるべきです。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪を行なうときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行ないなさい。そうすれば、支配者からほめられます。それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行なう人には怒りをもって報います。

(ローマ 13・1〜4)

今日の政府の最大の使命は、市民のいのちを守ることです。剣、つまり武器が与えられた目的は、外敵から国を守るため、国内における不法を防ぐため、そして市民のいのちを守るためです。政府は国境を守るために国民に呼びかけ、防衛のために武器を持たせる権利を持っています。なぜならば政府は国民のいのちを敵から守らなければならないからです。まさに第六の戒めを守るため、すなわち国民のいのちを守るために政府は武器を使います。

同じように諸国民の主である神は、ひとつの民族を滅ぼすために他の民族を使う権利をも持つ

ておられますし、その上さらに「咎が満ちるとき」その諸民族を全滅させる権利をも持つておられます。

今までの歴史において、イスラエルの民が偶像崇拜の罪に陥ったとき、主はその罪を罰するために、他の諸民族を用いて、イスラエルを正しい道に向けられました。

主の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、主は彼らを略奪者の手に渡して、彼らを略奪させた。主は回りの敵の手に彼ら売り渡した。それで、彼らはもはや、敵の前に立ち向かうことができなかつた。

(士師記 2・14)

主はある一つの民を滅ぼすために別の民を鉄槌としてお用いになり、それから鉄槌自体もその罪のゆえに滅ぼしてしまわれます。バビロン帝国の場合もそうでした。

万国を打った鉄槌は、どうして折られ、碎かれたのか。バビロンよ。どうして国々の恐怖となつたのか。

(エレミヤ 50・23)

カナンの地方に住む諸民族の「咎が満ちた」とき、主なる神はイスラエルにそれらの諸民族を絶滅させる命令を出されました。したがってカナンの地に住む人々の上にくだされた恐ろしいさばきは、第六の戒め、すなわち「殺してはならない」という戒めに対するイスラエルの違反ではなく、義なる神の聖なるみこころでした。

主なる神が、諸民族をその罪のゆえに恐ろしいさばきでもって打つとき、私たちは主の聖なる

義の前に沈黙せざるを得ません。

あなたの神、主は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つとき、あなたは彼らを聖絶しなければならぬ。彼らと何の契約も結んではならぬ。容赦してはならぬ。

(申命記 7・2)

世界史は今日もなお、神の世界支配の現われです。人間ではなく、そしてまた歴史的な人物たちでもなく、主なる神ご自身が歴史の主です。

もちろん政府が悪を罰するためではなく、まちがった動機で人を殺したり、他の国の領土や財産を奪ったりすると、その国の人々は大きな良心の呵責に苦しむようになります。十戒はただ単に個人に対してではなく、諸民族に対してもあてはまります。すべての国々の政府は、主なる神の支配に置かれており、したがって主の聖なるみこころの下に置かれています。

主なる神を恐れる者にとつては、神だけが最高の権威です。したがって政府が主なる神の戒めに逆らう場合、次のみことばが信者にあてはまります。

人に従うより、神に従うべきです。

(使徒 5・29)

人間ひとりひとりは、個人的な私生活において、社会生活において、あるいは兵役のある国はその生活において、行なつたあらゆる行為に対して神の前に責任を負っています。政府に対してでも、教会に対してでもなく、ひとりひとりがおのの行ないに対して、神の前に責任を取ら

なければなりません。しかし何と多くの人が、神の權威に従うことをせず、人の意を迎えようと
してまちがった命令に無抵抗に従ったりすることでしょうか。

今日の大きな問題は、人々が主なる神を主として認めず、力を持つ人に喜ばれようとし、上にある権力に簡単に従うことです。多くの人は、大勢の人がやっていることが正しいかどうかを判断するのではなく、「皆がしているから、自分もする」という状態に陥っています。

つまり現代で特徴的なことは、一人の人間や一つの国、また一つの民族の生死が、それを支配し命令する政府というものの価値判断、国際間の力関係の価値判断にかかっているということです。主なる神は、いかなる国家にも、政府にも、その国民の生死に関する決定権を一度もお与えになつたことはありません。人間ではなく主おひとりだけが、何が価値あるもので、何がまた価値のないものかをお決めになることができます。主の目からみれば、取るに足りない者、見下されている者こそ大切であり、貴いのです。

また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。

(1コリント 1・28)

今日人類は、人間の生命を尊重することをないがしろにしがちですが、それは創造主に対する畏敬の気持ちが行われていることにより、ますます大ききものに膨れ上がってきています。毎日の新聞には、殺人や自殺の記

この罪は、ますます大ききものに膨れ上がってきています。毎日の新聞には、殺人や自殺の記

事があふれています。そしてそれらが多すぎるために、殺人や自殺はもはや目立たなくなり、日常茶飯のことになってしまっています。そのため、これらのことに悩んでいる人々の叫びがほとんど伝わって来なくなってしまうています。

第六の戒めは、ただ単に国とか政府に向けられたものではありません。私たちの個人的な生活にも向けられています。多くの人々は、驚いて自問するでしょう。「この戒めはたして私に対して向けられているのだろうか。私は誰一人殺したこともなければ、殺そうと思ったこともない」と。

私たちは、日々の生活の中で、創造主の主権を完全に認めているでしょうか。現代では、産児制限や避妊をすることは、当たり前のようになっています。

日本の女性のかかりの人々は、子どもをおろした経験があるそうです。墮胎は第六番目の戒めに対する罪です。父親も母親も、創造主の前にこの罪に対しての責任があります。子どもが母親の胎内に宿ったときから、それはいのち、すなわち造り主の与えてくださったものであるということを実際に考えてください。現在、何と多くの方々も、この罪の負い目によって苦しんでいることでしょうか。イエス・キリストによる十字架の赦しがなければ、生涯、良心の呵責に責められることでしょうか。

自殺、またそれを考えることも、第六番目の戒めに対する罪にあたります。誰一人、主の前に自分の寿命を決める権利を持つてはいけません。現代人は何と簡単に自分のいのちを捨ててしまうことでしょうか。それが主による「恵みの時」を勝手に切り捨ててしまっていること、また私た

ちに与えられているもつとも尊い宝を投げ捨ててしまっているのだということを、人は知るべきです。

まだイエス様をご存知でない方々で、自殺以外にもはや何の逃れ道も見出すことができない絶望しきった方に、イエス様の愛と恵みと福音を伝えることに、もつと熱心になりましょう。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」と言われた主が、すべてを新しくし、希望に満ちた生活を与えてくださるということを、一日も早く、一刻も早く、伝えなければなりません。

また、気づかずにこの戒めに対して間接的に罪を犯している人も大勢います。自分のいのちを軽率に取り扱っている人々です。この世では、生命の危険をおかして冒険をすることは、英雄視されることが多いのですが、それらはいのちを粗末にし、乱用しているゆえに、主から忌み嫌われる行為です。

猛烈な経営者は、従業員の生命を損なっていることがあります。利益追求のために従業員の力を過度に利用し、そのため彼らの日常生活の恵みの時が短縮されることに気がついていません。これもまた、主の前に、責任を負わなければならない行為です。

さて、主は、この第六の戒めを、「殺人」という行為だけでなく、「剣のように人を刺す言葉」として、また「他の人の死を願う考え」として、きびしく戒めておられます。

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。

(1ヨハネ 3・15)

これらのみことばは、何と厳しく私たちの心の奥を照らすことでしょうか。あなたの心の中に、憎しみはないでしょうか。誰かがあなたに正しくないことをしたからといって、あなたはその人を憎んで当然だ、と思っていないでしょうか。イエス様を主として受け入れた人々にとつて、憎しみは決して正当化されません。憎しみは地獄の力です。憎しみと人殺しは、主の前では同じものです。

私たちは、まったく自分と関係ないと思っていた第六の戒め、「殺してはならない。」について、改めて自分を吟味してみると、戒めに従っていないことに気がつきます。ですから私たちは頭をたれ、主の前に恥じ入って身をかがめ、主に私たちの負い目を告白せざるをえないのです。しかし第六の戒めは、積極的な面も持っています。「あなたは殺してはならない」。私たちはいったい何をしたらいいのでしょうか。つまりそれは、「自分自身と同じように、あなたの隣人を愛しなさい」ということなのです。この戒めは、「殺してはならない」と、否定的な形で与えられています。それはつまり「愛しなさい」という肯定的な命令でもあります。人生の困難を軽くするため、苦しみを和らげるため、弱っている人や病人を助けるため、私たちはお互いにもっともつと助け合うべきではないでしょうか。

「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」(マルコ 12・31)と主は命じておられます。しかし多くの人々は他人に対してまったく無関心、無責任で愛がありません。カインと同じように、「私は、自分の弟の番人なのでしょうか。」(創世記 4・9)と言って平然としています。

このような言葉は、「兄弟殺しの言葉」だということをお忘れなく、

主を知るようになった者は、回心を通して、永遠のいのちを持つようになったのです。それらの人々は、隣人の永遠の救い、永遠のいのちに対して大きな責任を持っているのです。私たちは隣人をイエス様のもとに連れてきていますでしょうか。あるいは反対に引き離しているでしょうか。私たちは人々のたましいに対して、大きな責任を持っているのです。次のみことばは、私たちにもあてはまります。

「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くととき、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。わたしが悪者に、『あなたは必ず死ぬ。』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならぬ。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。」

(エゼキエル 3・17～19)

人間のいのちは、何と神聖なものでしょう。人間のいのちは、ただ単に神の賜物であるだけでなく、神の所有物であり、神の喜びです。主なる神は、人間のために人間を造ったのではなく、ご自身のためにお造りになりました。ですから私たちは、自分のためではなく、主なる神のため

に生きるべきです。

私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

(ローマ 14・7、8)

人間のいのちとは、何と重いものでしょうか。人間のいのちは、確かに生まれたときに始まりませんが、終わりはありません。人間はみなだれでも永遠に生きます。私たちは、この地上でのいのちを、自分のために生き、また自分のために死ぬことができるかも知れません。しかし、死後生き続けることから、決して解放されることはありません。私たちが望もうが望ままいが、永遠に生きなければなりません。問題は、私たちがいつまで永遠に生きるかということですよ。救い主としてイエス様を受け入れた者については、聖書は次のように言っています。

私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(1テサロニケ 4・17)

もし私たちが、自分から主なる神の前に頭を下げることを拒んだり、自分の罪を言い表わさなかったり、主から提供された罪の赦しを拒んだりしたならば、神から永遠に離れて存在しなければなりません。神から離れた状態とは、次のみことばのとおりです。

そこで、王はしもべたちに、「あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣

いて齒ざしりするのだ。」と言った。

(マタイ 22・13)

この地上における私たちの人生には大きな価値があります。この地上における人生は、永遠のための準備期間であり、神の救いを得るか、それを拒否するかの大決心の期間です。人間はひとり残らず、この地上における人生において、自分の永遠に関して、自分自身で決定しなければなりません。

主なる神は、私たち人間に、不思議な力、自己保存の本能をお与えになりました。ですから人間は、どんな代価を払っても自分のいのちを保とうとするのです。

サタンは主に答えて言った。「皮の代わりには皮をもつてします。人は自分のいのちの代わりには、すべての持ち物を与えるものです。」
(ヨブ 2・4)

永遠のいのちは、この地上のいのちよりもどれほど大切でしょうか。私たちは主とともにいつまでも生きる「永遠のいのち」を、十字架につけられ、よみがえられた救い主イエス様のみ手から受け取ることができます。イエス様がくださる最高の賜物、主とともにいつまでも生きる「永遠のいのち」と比べるなら、地上のいのちなどは小さなものです。

イエス・キリストを受け入れることによって、人間は「永遠のいのち」を持つ者となります。そして、その人の使命は、他の人もまた、イエス・キリストによって「永遠のいのち」を持つようにと、一生懸命に福音を伝えることです。他の人の救いのために、自分の全生涯を主に明け渡

す者となり、人々の救いのために、自分の地上のいのちを主に捧げる者となることです。パウロのように言うことができる人は幸いです。

私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。

(使徒 20・24)



10章

第七の戒め「姦淫してはならない」

姦淫してはならない。

(出エジプト 20・14)

モーセの十戒の順番には、すばらしい調和が神によって現わされています。それによって私たちは、「神にとって何が大切か」を知ることができます。人間に与えられたもつとも貴いものは主にあるいのちであり、人間生活のもつとも神聖な領域は結婚です。

結婚とは、男と女との間における霊とたましいと肉体との領域での、完全に排他的な、そして生涯にわたる交わりです。

主なる神は、ふたりの間のそのような交わりのために、男と女をお造りになりました。そしてそのために必要な賜物と能力とをお与えになり、神の聖なるみこころに従って一つにしてくださいました。

人間の創造は女を造られて初めて完成されました。

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

(創世記 1・27)

神はこのように男と女を創造されました。そして両者はお互いに補いあうことが必要ですが、それは神の姿を反映するという最高の課題を成就するためです。

創造主は、何と高い品位を男と女にお与えになったことでしょうか。

結婚は何と神聖なものでしょうか。このふたりの人間がひとつになることによって、神の栄光が現わされるのです。

新約聖書は、神の神聖なみこころによる結婚のすばらしい模範を、私たちに与えておられます。つまりそれは、「キリストと教会との関係」に比べられます。

なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

(エペソ 5・23、24、28、29)

なんとという実例、なんとという愛、なんとという一致でしょうか。それはつまり、キリストと教会の関係と同じです。キリストとキリストを信じた人たちとの交わりです。

まことの結婚は、すべて真実で神聖で完全なこの結合を反映すべきです。

結婚とは、主にある楽園の中に、ひとりの男とひとりの女によってしっかりと立てられるべきものです。

それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

(創世記 2・24)

雑婚は罪の結果であり、人類の墮落の結果です。すなわち神は人間と排他的、独占的な関係を持ちたいと切に望んでおられます。主の他に、いかなる神もあつてはなりません。そのように主なる神は、男と女の結婚を同じような排他的な関係として定めておられます。結婚した男と女の間に、第三者がはいることは許されません。

結婚は神が人間の手になされた最大の神聖なものです。しかし罪深い人間は、結婚をどのような状態にしてしまったのでしょうか。人間は、もつとも神聖な結婚の中に、罪を深く入り込ませ、神聖さを汚し、もつとも不純なものに変えてしまおうとしているのです。

現代の悲劇は、結婚という領域において、もつとも恐ろしい形で表われています。今日、結婚は多くの場合、人間の肉の思いと欲望のはけ口となっています。おのおのは異性との関係において、正しいことと正しくないことの基準を自分勝手に決めていきます。

また結婚は、今日では、ふたりの人間の個人的な関係だけになってしまつて、結婚の形や、その生活のあり方についてはふたりの人間が自由に決定しています。つまり、簡単に同棲したり、勝手に離れたたり、というようなことを繰り返しています。そして多くの人は、結婚の前や、結婚の間、あるいは結婚以外の関係においてさえも、自分自身の考えで肉欲の思うがままに行動し、それが当然の権利であるかのようにふるまっています。主なる神が支配しないところでは、人間の情欲のみが支配するのです。

もつとも恐ろしいことは、罪がもはや罪と呼ばれず、また罪と思われなくなることです。多く

の人は、結婚において忠実であることは時代遅れだ、と思っ
ています。人はしばしば神の戒めにさからいます。姦淫する
ことは許されているし、姦淫すべきである、と平気で言うよ
うになっています。

世界各国に見られる大変な数の離婚は、この事実を雄弁に物語っています。

「姦淫してはならない。」という戒めは、ただ単に結婚して
いる人にだけではなく、未婚の人にも向けられています。

大部分の結婚の悲劇においては、夫婦の間に未婚の女性
や未婚の男性が入り込んでくることの原因になっています。

現代、若い女性は家庭から出て、職場で積極的に男性と
共に働いています。しかし時にはそのことが、肉の欲のきつ
かけとなる場合があります。また多くの男性も、情欲の
とりこになっています。そしてそれによって、自分の意思に
反して、たましいが毒されてゆくのです。悪魔が織り成す
細い糸は若い男女を陥れます。最初はお互いに心と心が
通い合う友情、友達関係だったのが、知らず知らずのう
ちにとんでもない関係に発展してしまうことは少なくあり
ません。「火遊びは火事のもと」と言われている通りです。
悪魔は情欲という餌を使えば、人が簡単にわなに陥るこ
とをよく知っています。なんと多くの信者が、そのような誘
惑によって、毒され、破壊され、用いられなくなっ
てしまっているのでしょうか。

私たちはもつとも小さな誘惑でさえも、決して軽く考
えてはいけません。大部分の信者がどうして誘惑や攻撃に
負けるかと言いますと、自分は大丈夫だと思ひ込み、聖
霊の警告に耳を傾けよ

うとしないからです。

ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

(1コリント 10・12)

悪魔は嘘つきで詐欺師です。悪魔は信者が罪をいけないことだと思わないように欺き、むしろ何かすばらしいものであるかのように思わせます。そして悪魔は、誘惑や攻撃が成功して信者がわなに陥ると、今までかぶっていた仮面を脱いで恐ろしい正体を現わします。惑わされた者がなぜこんなことになってしまったのかわからないほど、悪魔の手口は巧妙です。

イエス様は、人間の心を完全にご存知です。主はたましいの救い主であり、人間、とりわけ信者たちをみことばによって罪に惑わされないように警告し、危険な道から守ろうとなさいいます。

主イエス様は姦淫の始まりを、次のように私たちに示して注意しておられます。

『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。』

(マタイ 5・27、28)

イエス様は、姦淫のほんの小さな兆候に対してさえも、何と厳しく重大なものと考えておられることでしょう。それはちょうど大きく危険な病いの初期の、ほんのちよつとした兆候と同じです。はじめはどんなに小さいものであっても、罪は罪、病いは病いであり、それが人間を滅ぼす

ことは、誰もが知っています。

姦淫と不品行の罪を、聖なる主は我慢なさることができません。個人の心の中においても、教会の中においても、主は不品行を赦すことがおできになりません。ですから聖書は、初めから終わりまで、非常に厳しく姦淫の罪に対する罰は、「神との交わりから締め出されることである」と、警告しています。

旧約の時代には、不品行を行なう者や姦淫を犯す者は、イスラエルの民から追放され、死刑に処せられました。

人がもし、他人の妻と姦通するなら、すなわちその隣人の妻と姦通するなら、姦通した男も女も必ず殺されなければならない。(レビ 20・10)

新約聖書もまた厳しく戒めています。

あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしめる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。(1コリント 6・9、10)

ここで姦淫をする者は、盗む者や酒に酔う者といつしよに考えられています。

「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、(あるいは、情欲をいだいて男を見るものは) すで

に心の中で姦淫を犯したのです。(マタイ 5・28)」という、イエス様のみことばを思うとき、私たちは恥じ入らざるを得ません。

犬ども、魔術を行なう者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行なう者はみな、外に出される。
(黙示 22・15)

ここには、「外に出される」と記されていますが、その外にいる状態は永遠に続きます。不品行な者は、人殺しとともに新しい地から追い出されます。第七の戒め、「姦淫してはならない」に反した場合ののろいと罰は、大変厳しく重大なものです。姦淫と不品行は、自分のからだに対して行なわれる罪ですから、その結果は重大です。不品行の結果は家族、次の世代、ひいてはその国民全体に対する罪となります。今日多くの国民は墮落してしまっていますが、その墮落の原因をよくたどってみると、ひとりひとりの隠れた罪が、国全体を墮落させた原因となっていることがよくわかります。

姦淫と不品行を行なうことは、主なる神の聖なる戒めに対して、とりわけ重大な罪を犯すこととなります。人間は不法な手段を使つてでも、どうしても欲しいものを手に入れようとします。すべての不純は、結局結婚を破壊するものです。

今日若い人たちの間で、肉体的に親しい関係になることが何でもないことだ、と考えられているという事は、実に恐るべきことです。結婚の前に、すでに若い男女が多くの性的な関係を持っている割合が決して小さいものではないということは、多くの医者が認めている事実です。

また、はじめは小さな割合であった婚前交渉は、今日では当然のこととされています。もちろんこれは若者のせいだけではありません。それに対して、はつきりとした態度を若者に指導したり、忠告したりする大人たちや教育者が少ないのです。何が正しく何が正しくないか、何が清く何が不純であるか、何が神聖で何が神聖でないかを判断する基準が、若者に正しく教えられていません。

信者でさえも正しい基準を知らず、罪の妥協の中に生活しているなら、正しい判断、基準を若者に教えることがどうしてできましようか。多くの場合、若者は罪の深みに入り込む前に、清くありたいという必死の戦いをするのですが、大人の助けがないためにだめになってしまうことが少なくありません。

私たち信者は、自分の国民の道徳的墮落の罪に対して、大きな責任を負っています。私たちは信者は、テレビや雑誌、映画などのマスコミの悪い影響に対して、また一般世論の墮落に対して、正しい判断基準を示し、第七の戒めを尊重するように努力しているのでしょうか。

多くの人は、時代遅れで、心の狭い者だと思われたくないばかりに、あえて右に述べたことを行ないませんでした。

私たちは、テレビ、または映画などに出ている、非道徳的なものに対して、黙っているべきでしようか。

また、今日の流行というものは、意識的か、無意識的にか、罪の誘惑をもたらす場合が多いのですが、人々は流行だからと言ってその影響をあまり真剣に考えようとしません。

「ご婦人は、意識しないで、性的な魅力のある服を身にまったりしますが、男性は、その姿を見て情欲をかきたてられ、罪の誘惑に陥りがちです。

隣人の家には火をつける者は、放火魔として罰せられます。しかし、隣人の心に情欲の火をつけるものは法律上は罰せられません。しかし、神の前には有罪です。

私たちが生きている上でのもっとも悲しいできごとの一つは結婚が悲劇の状態になっていることです。その行きつく果ては離婚です。その苦しみは測り知れないほど大きなものです。それはいわば「罪の大海」のようなもので、隠れたところでどれだけ涙が流され、心が傷つけられ、愛が踏みにじられ、多くの妻や夫や哀れな子どもたちの悩み、痛みとなっていることでしょうか。神の聖なるみこころが、どれだけ軽く考えられ、踏みにじられ、無視されていることでしょうか。

今日この問題については、多くの教会もまたこの世と妥協し、離婚もやむをえないとか、離婚後の再婚についても簡単に考えられていることが少なくありません。

聖書によると、結婚は死ぬまで分かつたことのないものであり、死んだときに初めて結婚の戒めから解放されるものです。

「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであつても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。」

(マタイ 5・32)

また、聖霊は使徒パウロを通して、次のように語っておられます。

夫のある女は、夫が生きている間は、律法によつて夫に結ばれています。しかし、夫が死ねば、夫に関する律法から解放されます。ですから、夫が生きている間に他の男に行けば、姦淫の女と呼ばれるのですが、夫が死ねば、律法から解放されており、たとい他の男に行つても、姦淫の女ではありません。

(ローマ 7・2、3)

新約聖書には、結婚の解体、あるいは無効宣言の意味による離婚は全く存在しません。結婚とは夫と妻が生きている限り解体され得ない、生涯の戒めです。

イエス様は、相手が絶えず姦淫を犯し続け、不品行の罪の中に生き続ける場合、離婚してもやむをえないと例外的に認めておられますが、しかしこの場合においてさえも、別れた結婚生活は、依然として結びつきを持っており、結婚の解体ではないと言っておられます。ですから、妻か夫のどちらか一方が生きている限り、再婚することは、別れた者たちには許されていません。主なる神のみことばは、私たちの信仰と行ないの、無条件の絶対的な基準ですから、どのような時代にあつても、例外やみことばの歪曲があつてはなりません。

主なる神の目は、私たちの生活のもっとも個人的な領域をも、見通すことができになります。主なる神は、人々が認めようが認めまいが、歓迎されようがされまいが、厳然として結婚についてのまことの規範を示しておられます。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸で

あり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

(ヘブル 4・13)

「イスラエル人の全会衆に告げて言え。あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならぬ。」

(レビ 19・2)

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

(1コリント 6・19、20)

私たちのからだは聖霊の宮として選ばれているものです。これを考えると私たちに望みが与えられます。なぜならば、たとえ私たちにはできないようなことがあっても、「聖霊にとつて不可能なことはない」からです。

聖霊は聖い生活をするための力強い力であり、助け手です。「あなたがたは、もはや自分自身のものではない」と書かれています。私たちのからだは、私たちのものではなく、主なる神の宮、聖霊の住まい、神の聖所なのです。主は私たちを支配してくださって、私たちをあらゆる汚れや不純から守ってくださいさるのです。

神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。

(1コリント 3・17)



11章

第八の戒め「盗んではならない」

盗んではならない。

(出エジプト 20・15)

私たちは、この地上にある「すべてのものは、主のものである」ということをしっかりと心に刻みこむべきです。

初めに、神が天と地を創造した。

(創世記 1・1)

聖書は、このみことばから始まります。これこそが、私たちの全存在の基盤です。

地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。

(詩篇 24・1)

これらのみことばの中に、天地の創造者である主のみどころが明らかにされています。主だけが、天地のただひとりの所有者です。主はこの地上のすべてのものと、すべての自然の力を支配しておられます。

人間は、それら地上のものを、主の御手からいただくのです。主なる神は、「世界とそれに満ちるものはわたしのものだから。(詩篇 50・12)」と言われます。しかし人間は、この地上にあるものを自分の所有物であるとみなし、神を無視してすべてを自分の思い通りにしたいと思っています。

モーセの十戒の前書きにある「わたしは、…あなたの神、主である。(出エジプト 20・2)」というみことばと、第八の戒め「盗んではならない。」とは、密接な関係があります。まず、「私たちが持っているものは、すべて主のものだ」ということを、はっきり認識しておくことが大切です。主なる神との関係が正しければ、私たちとこの世のすべてのものとの関係も、正しいものとなります。この地球の造り主としての主なる神を畏れをもって認識した者は、神の偉大さと権威の前におののかざるをえません。私たちはどれだけ多くのものを主に依存していることでしょうか。

また、個人だけでなく、国々もまた、主なる神の支配下に置かれています。

神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。(使徒 17・26)

神は季節と時を変え、王を廃し、王を立て、知者には知恵を、理性のある者には知識を授けられる。(ダニエル 2・21)

現代の混乱を見てください。人間は、神を離れて何をやってもいいという、思い上がった幻想を一刻も早く捨て去るべきです。

いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てる…。(ダニエル 4・17)

人間は、創造主である神に栄光を帰すことのなんと少なく、また神が私たちにくださる賜物に對して感謝することのなんと少ないことでしょうか。

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。

(1コリント 4・7)

私たちは何一つこの世に持って来なかつたし、また何一つ持つて出ることでもできません。

(1テモテ 6・7)

このことを知るなら、私たちは主なる神に栄光を帰し、私たち自身は所有者ではなく、また与える者でもないことをよくわきまえるのは当然のことです。私たちには、何一つ、「これは私たちのものだ」と言う権利はありません。私たちはそれらのものを主なる神から任され、短い期間、管理しているに過ぎません。私たちは単に主のしもべであつて、自分勝手にできるものなど何一つないのです。

主こそ、主が望むものを望むときにお与えになり、また取る権威を持つておられます。

私たちができることはただ一つです。「主が私たちにくださるすべてのことに対して、主に感謝すること」です。というのは、すべては私たちの手柄ではなく、神の恵みだからです。たと

え主が私たちから何かを取り去られることがあっても、主を賛美しましょう。

私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。
(ヨブ記 1・21)

「神から誉れを奪い取る」ことは、この世に存在するもつともひどい窃盗行為です。ただ任されて管理しているに過ぎない者が、所有者としてふるまうとすれば、それは詐欺以外の何ものでもありません。

「盗んではならない。」という戒めは、まず第一に、主なる神への私たちの行為に対して適用される戒めだということを、真剣に受け止めましょう。

主なる神がお造りになったものはすべて良く、価値があり、人間を喜ばせ、そして神ご自身の栄光を現わします。

神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。
(1テモテ 4・4)

銀はわたしのもの。金もわたしのもの。――万軍の主の御告げ。――
(ハガイ 2・8)

人間の罪深い手が神の所有物をわがものとし、それを自分勝手な目的に役立てようとすると、神が「人間の手段」になってしまいます。これこそがもつとも罪の大きい「盗み」です。しか

し、現実には、神の賜物をみだりに使うことがなんと多いことでしょうか。権力欲を満たすために、隣人を殺すために、自分勝手なわがままを通すために、また罪深い目的を達するために、神の所有物がとれただけ不当に使われていることでしょうか。

「神の賜物の濫用」は、神の所有物を侵すことであり、したがって「盗んではならない。」という第八の戒めに対する罪です。人間は、この地上のものを神の御手から感謝して受け取る者、そして神から管理を頼まれているにすぎない者であるということを知っている人は、神のみこころに逆らってまで神の所有物を使うことができません。

主なる神は、主が個人にお与えになったものを守ってくださいます。「盗んではならない。」という戒めは主のくださる防壁であり、神の聖なる「垣根」です。

したがって、あらゆる盗みは、人間に対する不正であるだけでなく、「神に対する不正」です。人間が持っているものはすべて主のものですから、それを盗むことは神に対する「盗み」です。

「盗んではならない。」と主なる神の命令があるから、つまり主が所有物を守ってくださいるから、私たちは、主が「私たちひとりひとりの私有を望んでおられる」ということがわかります。

「六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければなりません。」(出エジプト 20・9)と言われた主は、ここでは「盗んではならない。」と命令しておられます。労働は所有物を獲得するために神の与えられた道です。聖書は神の聖なるみこころにかなった人間の日常生活を整えてくださいます。また聖書は神に喜ばれる社会生活のための基礎です。

旧約聖書と新約聖書の中で労働と賃金に関して私たちに与えられている基本的な考え方を、尊重し、応用するなら、多くの社会問題は解決し、盗みの誘惑もなくなることでしょう。

それについての主イエス様のみことばは、なんと単純で基本的でしょうか。

働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。

(ルカ 10・7)

パウロは次のように言っています。

私たちは、あなたがたのところにいたときにも、働きたくない者は食べるなど命じました。
(2テサロニケ 3・10)

労働に対して正当な賃金を支払わない者は、そこで働く人々の不満や憤激を呼び起こし、盗みの誘惑をはびこらせます。

ヤコブは、信者でありながら労働を搾取した者について、厳しい警告を発しています。

聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思っ泣き叫びなさい。

あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のようになり食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。見なさい。あなたがたの畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金が、叫び声をあげています。そして、取り入れをした人たちの叫び声は、万軍の主の耳に届いています。

人間が作った法律の目からのがられても、主なる神の目からみれば正しくない所有物がたくさんあります。法律にはかからないとしても、神の前では許されないような金儲けの抜け道はたくさんあります。

私たちが手にする労働の報酬、贈り物、遺産などは、主の御手から受け取るものであり、正當な所有物です。しかし、盗んだものや不正に獲得した利益は、神の前に認められず、不正な財産と見なされます。

また今日、なんと多くの人が、競馬、競輪、くじ、投機などによって不当にお金を儲けようとしていることでしょう。一人の人が賞金を獲得するためには、どれだけ多くの人がお金を失わなければならぬことでしょう。賞金を獲得したら、それは同胞のお金を取る、ということになります。これは主なる神の前に正当化されることはありません。賭けによって得たお金は、悪魔からの贈り物です。主はそのようなお金に祝福を与えることができません。

私たちはその実例を、聖書の中に見ることができます。アブラハムは、ソドムの王から何一つ受け取るうとはしませんでした。彼はそれが正当な方法によるものではないことをよく知っていました。

アブラムはソドムの王に言った。「私は天と地を造られた方、いと高き神、主に誓う。

糸一本でも、くつつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あな

だが、『アブラムを富ませたのは私だ。』と言わないためだ。」（創世記 14・22、23）

私たちの集会がお金を必要とする場合、未信者からは絶対に頂かないという態度を守れば、主は豊かな祝福を与えてくださるでしょう。

主イエス様は、悪魔の誘惑にあわれたとき、正当な方法によらずに食料をもらうことは、どんなに飢えていたとしても正しくない、として悪魔の誘惑を退けられました。主イエス様はただ父なる神の御手からの恵みのみで生きることを望まれ、すべてにおいて父なる神が配慮していただくということを、よく知っておられたのです。

また、自分は「泥棒ではない」と思っている人でも、不注意によって第八の戒めに反する場合があります。たとえば、借りた本を返すのを忘れた場合、それは一種の盗みになってしまいます。

「盗んではならない。」という第八の戒めはまた、個人の所有物だけではなく、会社や学校、集会などの所有物についてもあてはまります。

通常、人々は、他人の家に入った盗んだりはしません。しかしそのような人々も、公のものを私物化することに平気だったりします。会社の従業員は、軽い気持ちで雇い主の所有物を失敬しないでしようか。勤務時間中に自分の用事をしたり、そのために会社のものを使ったりしないでしょうか。神の目から見ると、これらは決して正しいことではありません。

また、世の中には、どれほど多くのうそ、偽り、盗みが、私たちの生活の中に根づいているこ

とでしょうか。どれだけのビジネスが、うそとまことを区別し、また神のみこころと自分の思いを区別して行なわれているでしょうか。経済生活における危険や誘惑は非常に大きく、神の力なしには罪を犯さないでやっていくことは不可能です。

「盗んではならない。」という第八の戒めを犯すことの根は、結局、聖書が「金銭を愛すること」と呼んでいるものに他なりません。

金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れられる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。あ
る人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し
通しました。

(1テモテ 6・9、10)

金銭に対する執着心は、なんと深く人間の本性に根を下ろしていることでしょうか。多くの人は、自分はそんなことはない、と思いつ込んでいます。はたしてそうでしょうか。

欲張り、けちもまた、人の心に深く巣くっている罪です。紙一枚、本一冊、家具一つ手放せない人がいます。またある人は、自分の利益をなすりかまわず追求します。

こうした性質は、金銭を愛することから来ます。金銭欲は、心の中だけでなく、貧しい人々の心の中にもあります。この世のものは、蓄えられるためではなく、用いられるために主からゆだねられています。

盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをする

ため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。(エペソ 4・28)

主イエス様に従う者が、覚えなければならぬことは、「自分たちが持っているものは、自分たちのものではなく、神から預けられ、ゆだねられたものである」ということです。なぜ、主は私たちにゆだねられたのでしょうか。それは福音を宣べ伝えるため、悩んでいる人々が、主のみもとに来るために用いられるべきものだからです。

旧約聖書の時代には、収入の十分の一が主に捧げられました。そしてイスラエルの民がこのことを実行したとき、主は豊かに祝福してくださったのです。

「十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。——万軍の主は仰せられる。——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」

(マラキ 3・10)

これはすばらしい神の約束です。私たちはみことばに従って、喜んで収入の十分の一を主に捧げますが、それは、決して律法に強制されてではなく、主に對する愛と従順の表われです。もちろん、すべては主のものでありますから、私たちが持っているものすべては、いつでも主に捧げる心構えが必要です。

もちろん新約聖書は、収入の十分の一だけではなく、持っている物すべてを主に捧げなさい、

なぜならばすべては主の物だからです。とあります。

主に喜んでいただきたいと思う者は、すべてを主に捧げるべきです。「主よ。私は何をしたらよいのでしょうか」というパウロの祈りは、私たちが持っているものに対しても同じ態度を取るべきことを教えてくれます。

ユダ部族の人たちが、バビロン捕囚から帰還したとき、主は次のように嘆かれました。

「万軍の主はこう仰せられる。この民は、主の宮を建てる時はまだ来ない、と言っている。」ついで預言者ハガイを通して、次のような主のことばがあった。「この宮が廢墟となつているのに、あなたがただけが板張りの家に住むべき時であるうか。」

(ハガイ 1・2〜4)

当時の信者たちは、主のことよりも自分を大事にしたために、次のような結果になってしまいました。

あなたがたは、多くの種を蒔いたが少ししか取り入れず、食べたが飽き足らず、飲んだが酔えず、着物を着たが暖まらない。かせぐ者がかせいでも、穴のあいた袋に入れるだけだ。

(ハガイ 1・6)

主のものを主から奪うことも、「盗んではならない。」という第八の戒めに反する罪です。主イエスは山上の垂訓で、ご自分に属する者が、地上のものに対してどのような態度を取るべきか

を明らかにしておられます。

「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むことありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」

(マタイ 6・19～21)

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

(マタイ 6・33)



12章

第九の戒め「偽りの証言をしてはならない」

あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。

(出エジプト 20・16)

人間の情報交換は、言葉によって成りたっています。言葉は私たちの考え、感情、意思など多くのものを表現し、伝達します。それに視覚がともなうと、さらに多くの情報を伝えることができます。ラジオやテレビは、ニュースを即時に全世界に伝えることができます。

今日人間は、マスコミの力によって、大きな影響を受ける時代になりました。

また、言葉は恐ろしい力を持っています。ただひとつの言葉が打ちひしがれた者を立ち上げらせ、絶望した者を救い、疲れた者に力を与えることがある反面、ひとつの言葉が人間を裁いたり、非難したり、心を傷つけたり、名誉を損なったり、人生の生きる可能性をすべてためにしたりすることもあります。

ひとつの言葉は、一瞬のうちに発せられますが、その作用は大きく、いつまでも残ります。

私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。馬を御するために、くつわをその口にかけて、馬のからだ全体を引き回すことができます。また、船を見なさい。あのように大きな物が、強い風に押されているときでも、ごく小さなかじによって、かじを取る人の思いどおりの所へ持って行かれるのです。

同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。ご覧なさい。あの一

うに小さい火があのような大きい森を燃やします。舌は火であり、不義の世界です。舌は私たちの器官の一つですが、からだ全体を汚し、人生の車輪を焼き、そしてゲヘナの火によって焼かれます。どのような種類の獣も鳥も、はうものも海の生き物も、人類によって制せられるし、すでに制せられています。しかし、舌を制御することは、だれにもできません。それは少しもじっとしていない悪であり、死の毒に満ちています。

私たちは、舌をもって、主であり父である方をほめたたえ、同じ舌をもって、神にかたどって造られた人をのろいます。賛美とのろいと同じ口から出て来るのです。私の兄弟たち。このようなことは、あってはなりません。泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか。私の兄弟たち。いちじくの木がオリーブの実をならせたり、ぶどうの木がいちじくの実をならせたりするようなことは、できることでしょうか。塩水が甘い水を出すこともできないことです。

(ヤコブ 3・2〜12)

このみことばは、信者にとってきわめて大切なことが語られています。信者といえども常に主のご支配のもとにいるとは限らない、という厳しい現実です。

私たちは「間違ったことをする」ことには非常に警戒しますが、「間違ったことを言う」ことは、それほどひどいことだとは思っていません。私たちの言葉のひとつひとつは、ちょうど池に投げ込まれた石のように、影響の輪を広げていきます。もし私たちが、今まで自分が語った言葉の悪い影響を目で見ることができたなら、そのあまりのひどさに驚いて絶望してしまわずに

う。

神のみことばである聖書は、私たちが今までに語ったすべての言葉に対して責任を負わなければなりませんと言っています。

「わたしはあなたがたに、こう言いましょう。人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。」
(マタイ 12・36)

ここにあるように、さばきの日に、いったい誰が聖なる神の前に立つことができるでしょうか。ひと言も間違ったことを言わなかったというような人が私たちの中にいるでしょうか。主イエス様だけが、次のように言うことができました。

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことは、霊であり、またいのちです。」
(ヨハネ 6・63)

私たち人間の言葉は、その多くが自分勝手であり、肉のあらわれであり、時には死をもたらすようなものではないでしょうか。それに比べて、主のことばはなんと聖く純粹で愛に満ち、力を与え、同時に鋭く私たちの心を刺し通すものではないでしょうか。

「真理によって彼らを聖め別つてください。あなたのみことばは真理です。」

(ヨハネ 17・17)

主のことは真理ですが、私たちの言葉はどのようなものでしょうか。

蛇のように、その舌を鋭くし、そのくちびるの下には、まむしの毒があります。

(詩篇 140・3)

十戒のうちの第六、第七、第八の戒めを守ろうとしている人々は、それが行ないただけでなく、言葉によって人を殺し、姦淫し、盗むこともあるのだ、ということを知らなければなりません。

もし間違った偽りの証言によって隣人の名誉を奪うなら、それは盗みではないでしょうか。自分の悪い所は自分の責任ですが、うわさは本人が知らないうちにその人を傷つけます。不用意にうわさをすることはある意味で殺人です。

真実の姿は、ある人は、うわさよりも良い人であり、ある人はうわさよりも悪い人なのです。

多くの人々は、周囲のうわさによってひどい状態に陥り、場合によっては、悪口によって人生がめちやめちやになってしまい、その心の傷は再び癒されることがないほどになってしまいます。

確かに周囲の人がその人をどう考えるかということは、究極的には大切ではありませんが、悪口によって、信頼が失われると、皆といっしょに仕事をすることは非常に困難になってしまいます。また、良いうわさは、着物のように、その人を守ってくれます。

私たちは隣人の名誉に対して責任を持っています。私たちは、私たちが知っているすべての人の名誉の番人です。人は自己紹介をすると、自分の名前を出したことによってその名誉を皆に委ねることになります。

しかし主は、「あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。」（出エジプト 20・16）という戒めを通して隣人を守ろうとしておられます。偽りの証言は、裁判で証人が事実と違うことを述べることを言います。人の思い、主観で何かを付け加えたり、削除したりすることは、偽りの証言です。

しかし、日常生活において、何と多く、「偽りの証言」がなされることでしょうか。多くの人々は会話の中でしょっちゅう隣人について語ります。たとえ悪気は全然なくとも、隣人や親しい人のことをあまり詳しく話しすぎることは、まずい結果をもたらします。

悪口は人が集まる所ならどこでも語られますが、それは現代の大きな伝染病のようなものです。多くの場合、それは真実でない正しくない言葉であって、それによって隣人の名誉が奪われてしまうのです。

私たちは、ある人について聞いたことを、確かめもせずに、何と簡単に他の人々に伝えてしまうことでしょうか。そしてその結果として、偽りを広め、サタンに利する結果になってしまいます。また悪口は、他人の成功をねたむ気持ちから出ることがあります。この場合の悪口は、「盗み」です。

信者である私たちは、このような闇のわざに加わってはなりません。自分の周囲の人々についての悪口を言ったり聞いたりする誘惑を断固として拒絶しなければなりません。

キリスト者は永遠のいのちを持っている人間ですから、その言葉は人を生かし、力を与える泉でなければなりません。私たちの会話は、言葉の毒を消す働きを持ち、価値があり、心を喜ばせ

るものであるべきです。

あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。

(コロサイ 4・6)

隣人に対する私たちの態度については、聖書の中にはっきりとした命令が記されています。多く語ることは常に危険です。

「だから、あなたがたは、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです。」

(マタイ 5・37)

そして、隣人に対しての態度についても、はっきりと教えています。

「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください。』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。」

(マタイ 7・1～5)

隣人のたましいの医者であれ、というのがイエス様の示された態度でした。

愛と礼儀、祈りと涙をもって、迷えるたましいを導きなさい、と示しています。私たちは隣人の裁判官ではありません。ただイエス様おひとりだけが裁き主です。裁判官ではなく、喜びのために働く協力者として、隣人に接することを主は望んでおられます。

私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために働く協力者です。あなたがたは、信仰に堅く立っているからです。

(2コリント 1・24)

信者同志の言動についても、この警告は大きな意味を持っています。よく、兄弟姉妹が残酷に別の兄弟姉妹を批判することがあります。主のみからだである教会が、愛のない会話や、偽りの告げ口などによって傷つけられ、分裂し、働く能力を失ってしまうとき、主の痛みと苦しみはどんなに大きいことでしょうか。

もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいません。気をつけなさい。

(ガラテヤ 5・15)

次のみことばも覚えましょう。

あなたはいつたいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。

(ローマ 14・4)

私たちの思いや舌を、聖霊が支配してくださることは、どれだけ必要なことでしょうか。ただ主おひとりだけが私たちの舌を制御し、用いられます。

みことばによって主をほめたたえ、主のすばらしい御名とイエス様の十字架による救いを宣べ伝えることは、何というすばらしい特権でしょうか。

主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げる
でしよう。
(詩篇 51・15)

私たちは信者として、時に他の人々の悪口の対象になります。そして、悪魔は信者を損ない、傷つけ、だめにしようとして、好んで他人の舌を利用します。主イエス様も、色々な人々の偽りの証言にさらされ、悪口の的とされました。主イエス様のご生涯は、敵の唇から放たれる矢にさらされる受難でした。人間の偽りの証言は、イエス様を死刑に定め、十字架の死へと追いやったのです。

さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える偽証を求めていた。偽証者がたくさん出て来たが、証拠はつかめなかった。しかし、最後にふたりの者が進み出て、言った。「この人は、『わたしは神の神殿をこわして、それを三日のうちに建て直せる。』と言いました。」そこで、大祭司は立ち上がってイエスに言った。「何も答えないのですか。この人たちが、あなたに不利な証言をしていますか、これはどうなので

すか。」しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」

イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきませんが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るようになります。」

すると、大祭司は、自分の衣を引き裂いて言った。「神への冒瀆だ。これでもまだ、証人が必要でしょうか。あなたがたは、今、神をけがすことばを聞いたのです。どう考えますか。」彼らは答えて、「彼は死刑に当たる。」と言った。(マタイ 26・59～66)

これこそ、「偽りの証言をしてはならない」という第九の戒めに対する最大の罪です。イエス様は確かに人間の偽りの証言の犠牲として殺されました。それ以来、悪魔はイエス様の弟子たちを迫害し、彼らの働きを破壊するため、何度も何度も同じ武器を使用しました。イエス様は弟子たちにはあらかじめ予告し、とりわけ人々の偽りの証言に対して正しい心の態度を取るように言われました。

「わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのです。あなたがたより前に来た預言者たちも、その

ように迫害されました。」

(マタイ 5・11、12)

主に従おうとする者は、みな例外なく聖書に記されているように、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたりするのです。

また、ほめられたり、そしられたり、悪評を受けたり、好評を博したりすることによって、自分を神のしもべとして推薦しているのです。
(2コリント 6・8)

自分に対する悪口を聞くと、もう主のしもべとして走るのをやめ、福音を宣べ伝えるのをやめよう、という気持ちになるかもしれません。しかし、私たちは人間の言葉に動かされる必要はありません。なぜなら、私たちはイエス様のしもべであり、ただひとりイエス様から命令を受けとる者だからです。

兄弟姉妹から考え抜かれた末に祈って与えられる注意や警告、勧めはみな、私たちにとって、真に価値のあるものであり、主の前における悔い改めと訓練のきっかけになります。しかし、軽々しい悪口や悪意のある偽りの証言は、主のみこころに反し、人々を妨げ、押さえつけたり麻痺させたりするので、言うてはなりません。私たちは主のさばきと判決のもとにあるので、人間の悪意ある証言や判決からは解放されています。

しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。

私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。

(1コリント 4・3～5)

主イエス様は、毒に満ちたひどい偽りの攻撃に対して、少しも弁明しようとなさいませんでした。ご自身は「まことに神の御子である」という証言をしておられます。

また、パウロも悪口と批難との激しい闘いを絶えず続けていました。町から町へ、国から国へと、悪口はパウロを追いかけました。パウロは比べるもののないほど攻撃され、その攻撃もこの世の人々からだけでなく、偽りの兄弟からも痛めつけられましたが、常に圧倒的な勝利者であることができました。

ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

(2コリント 12・10)

パウロは自分自身のために自己弁護をしませんでしたが、使徒としての彼の使命の権威が攻撃されたときは、自分の名譽のためではなく、主によって与えられた福音のために、鋭い武器で戦い通しました。

私たちもまた、主を第一として生きるならば、イエス様やパウロと同じように、多くの迫害を受け、偽りの証言を受けます。

私たちは信者として、しばしばこの世の批判にさらされます。ですからもつとも大切なことは、私たち信者の言動のすべてが、偽りの証言を受けないように、実際に一致していることです。

外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。

(コロサイ 4・5)

私たちは、私たちの全生涯と誉れを、ただ主の御手にだけ明け渡しましょう。そうすれば、主は私たちを正しく導いてくださり、私たちをひねくれた悪人どもの手から救い出してくださいませ。

また、私たちが、ひねくれた悪人どもの手から救い出されますように。すべての人が信仰を持っていてのではないからです。

(2テサロニケ 3・2)

「主がともにおられる」という聖霊の証言を持つことのできる私たちは幸いです。私たちの全生涯における願いは、主のみどころにかなった歩みをして、いつか将来、私たちの生涯に関する主の判決を聞くことです。

その主人は彼に言った。「よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に



忠実だったから、私はあ
なたにたくさんの物を任
せよう。主人の喜びをと
もに喜んでくれ。」

(マタイ 25・21)

13章

第十の戒め「隣人のものを

欲しがってはならない」

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。

(出エジプト 20・17)

主なる神の聖なるみこころは、いつも私たちの全生涯を包みこんでいます。私たちが自分勝手に動いているような生活領域、主なる神に隠していられるような生活領域は、何一つありません。

聖書の「十戒」は完全なものです。主は、私たちの人間関係も、活動領域も、力も、能力もすべてをよく考えておられ、それを導くために十戒をお与えになったのです。

人間が作った法律は、ただ人間の行為だけを罰します。なぜならば、人間は他の人の心の中の思いや考えを明るみに出して裁くことが不可能だからです。

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」

(1サムエル 16・7)

したがって人間の動機や思いを判定するのは、検事でも裁判官でもなく、主なる神ご自身なのです。もし、人間の裁きが人の心を裁こうとすれば、必ず、不法や不義、さらにはうそ、偽り、偽善などがまぎれ込んでこざるをえません。

人間の心を創造された主なる神だけが、人間の心の奥底を見通すことができになります。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

(ヘブル 4・13)

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそ私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。あなたは前からうしろから私を取り囲み、御手を私の上に置かれました。そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高くて、及びもつきません。

(詩篇 139・1～6)

主なる神はなんと偉大なお方でしょうか。私たちの心の中にあるすべての思い、一瞬の内心をよぎる感情、そのすべてを私たちは知ることができませんが、主にはその深みに至るまで、私たち自身が気がつかない奥底までも、主はご存知です。

主イエス様について次のように書かれています。

イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。

(ヨハネ 2・24、25)

「わたしは、…あなたの神、主である。」

(出エジプト 20・2)

全知全能である神のこのみことばは、私たちの感情、思い、心の奥底の欲望など、私たちのたましいすべての上に厳然として響きわたります。主なる神の聖なるみこころは、私たちの思考、感情、意欲などのすべてを包んでいます。それは、私たちのまったく個人的私生活、つまり、一般の人の目には隠されていて私たちが秘密にしておきたいと思う領域の中さえも、神の目に明らかです。

人間の心の中には、どのような世界が潜んでいるのでしょうか。それは「強盗の巣」、暗やみの地下世界、つまり、どろどろした世界にほかなりません。

私たちはしばしば私たちの心の中で考えられていることを隠したいと思います。もしも私たちの心の奥底に動いているものがすべて一度に明るいスクリーンに映し出されたなら、それは大変なショックでしょう。私たちは驚きのあまり、確かにそれが自分の姿であるとは認識できないでしょう。

すべてを見通す神の目は、すべてのことを見ておられます。主はすべてをご存知で、主にとつて隠されているものは何ひとつありません。

第十の戒めは、人間の心のもっとも奥底にあるものを表わしています。主なる神はただ単に、私たちの表に出た行動の裁き主、口から出た一つ一つの言葉の裁き主だけでなく、私たちの心の

底にうごめくさまざまな考えやばかりごとの裁き主でもあります。

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやばかりごとを判別することができま
す。
(ヘブル 4・12)

ここでは、行為と言葉のもととなる「心」が問題です。

「悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。」

(マタイ 15・19)

第十番目の戒めは、「悪い欲望が、あらゆる罪のもつとも深い根である」と言っています。

さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。」そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っています。」そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良

く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかつた。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。(創世記 3・1～6)

よく知られているところですが、ここでエバに、ついでアダムに心の欲望が目覚め、欲しいと思う気持ちが強くなり、禁じられているものに手を伸ばしたので。事情は現代でもまったく同じです。欲望はあらゆる他の戒めを犯すことの大きな原因となります。人間は欲望によって支配されると、「欲望の奴隷」になってしまいます。

私たちは、多くの場合、「欲しい」と思うことだけをして、「欲しくない」ことはしたがります。「欲望」が私たちの生涯の基準となり心を占めてしまうと、もはや神の聖なるみこころは基準とはなり得ません。

「他の人が持っているものをどうしても欲しい」という欲望は、盗みや姦淫や殺人を引き起します。心の中に戦いの場があり、心の中で欲望を満たすための決定が行なわれます。心があほしい、こうしたいと命令するのです。

人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。(ヤコブ 1・14、15)

「欲望」はただ単に個人生活の中で原動力となるだけではなく、社会や国民生活、国家の原動力となります。人間は他人が持っているものを持ちたいと思います。ある階級は別の階級が持つ

ている利益を享受したいと思います。一民族は他民族が持っている支配力や経済力、豊かな生活圏を持ちたいと思います。

「欲望」はまた、火山のように爆発し、邪魔するものすべてを溶岩で焼き尽くそうとします。国家の欲望と国家の欲望が妥協して結ばれた協定や条約は、火山の周りに張りめぐらされる木の柵にたとえられます。火山が静かな間は、美しい境界に見えますが、火山が爆発すれば、何の役にも立ちません。

他人のものを欲しがる欲望は、すべての人間を不条理な、恐ろしい姿に変えていきます。その結果、誰ひとり他人を信用しなくなり、不信はさらなる不信へと増幅していきます。

経済的、社会的、政治的生活は、今日では相互不信の上に成り立ち、その結果は人間関係における極度の不安となっています。私たちは神の聖なるみこころをないがしろにしました。ですから人間の心にある悪い欲が、有毒ガスのように世界の国をよごしたのです。

あなたの隣人の家を欲しがってはならない。
(出エジプト 20・17)

この主なる神の権威あるみことばは、主のみこころを現わしています。この戒めは、もともと深い根源にある人間の罪を示します。この戒めはあらゆる苦しみと悩みの原因を明らかにしているのです。

欲しがることはつまり、他人のものを持ちたがることです。隣人の家、妻、召使い、財産などを持ちたがることです。欲望はすべてのものに目を向けます。他人の家庭生活に入り込み、他人

の社会関係や他人の物質的な所有物に立ち入ります。欲望は自分のものにして独占したがるのです。そして満たされない欲望の結果はねたみであり、このねたみから嫉妬が生まれます。嫉妬は自分の欲しいと思ったものを手に入れるためのあらゆる手段と方法を探し求めます。悪い欲望の結果として、今日どれほど多くのねたみと嫉妬が広がっていくことでしょうか。

これらのものは、家庭、集会、国、世界などにおける共同生活を分裂させ、破壊します。ねたみや嫉妬によって動かされる者は毒をまき散らします。

ねたみと嫉妬とは、人と人との親しい関係を壊し、強く結びついていた絆をも断ち切ります。そして、イエス様のみからだである集会をも分裂させます。

この第十番目の神の戒めは、欲望が持つ恐ろしい力を認識し、その源を正しく見極め、神のみこころに対する敵としてきびしく認識するよう、私たちに警告しています。

結局、人間が抱くあらゆる悪い欲望は、主なる神に対する罪です。他人のものを持ちたいと思う者は、自分が持っているものに満足しません。つまり神に対して不平を言うことになります。主なる神を批判することになります。それは、主の愛と義を疑う態度です。

荒野にいるイスラエルの民は疑うようになり、いつも神に不平を言い、それによって主に罪を犯しました。

私たちが他人の持っている教育、才能、財産などをねたんで、自分も持ちたいと思うことは、造り主である神に対して、不平不満を言うことになります。

この第十番目の戒めは、私たちの罪のもっとも深い根を刺し通します。おそらく私たちは、今

まで主の恵みによって犯罪を犯さなかったし、ひどい悪口を言わなかったかもしれませんが、しかし、私たちの心の底には、みにくい欲望が支配しているのではないのでしょうか。

みにくい欲望は言葉や行ないよりも危険です。なぜなら、それは知らず知らずのうちに関心の中心に発生し、長い間人の目に隠されており、しかし最後には言葉や行ないの中に正体を現わすからです。したがって、聖書は心の中にある悪い欲の恐ろしさを強調し、それに屈服しないように警告しています。

金錢を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」

(ヘブル 13・5)

「私は欲しい」と魅惑的に、あるいは命令的に語る自分の心の独裁者から、信者として解放される手段は、ただ一つです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

(ローマ 6・6)

人間の欲望は、主イエス様の死によって力を奪われました。解放された者として私たちはもはやこの欲に縛られることはありません。

キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。
(ガラテヤ 5・24)

最後に聖書のなかでもっとも大切なみことばの一つ、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。(ルカ 18・13)」というみことばをご一緒に考えてみましょう。

私たちは十戒を通して、主なる神の聖なるみことばを知ることができるようになりました。みことばの光によって、私たちの生涯のすべてが明るみに出され、私たちの心の奥底が明るみに出されました。

すると彼は言った。「そのようなことはみな、小さい時から守っております。」

(ルカ 18・21)

その昔、ある若者は、十戒についてこのようにイエス様に答えました。私たちは同じように答えられるでしょうか。そのように答えられる人はひとりもないはずで、私たちが知っているのは、次のことです。

神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。
(ヘブル 4・12)

私たちにできることはただ一つ、ヨブ記9章3節に書いてあるように、「たとい神と言い争おうと思っても、千に一つも答えられまい。(ヨブ 9・3)」と告白できるだけです。主の前には全面的な服従があるのみです。主の御前にへりくだり、白い旗を揚げる人は幸いです。

宮に上って、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。(ルカ 18・13)」と言った取税人はこの態度を取ったのです。主は私たちから、自由で隠しごとのない罪の告白を聞きたいと願っておられます。私たちは聖霊を通して罪を示され認めることができるようになりましたが、それだけではなく、自分の唇を通して、罪の告白をしなければなりません。

主の御前に明らかにされた罪を、告白してください。取り繕ったり、言い訳をしたりしないで、ありのままの状態、あらゆる考えや不純を主イエス様に告白してください。もし私たちが罪を隠そうとし、覆いつくそうとすれば、悲劇的なことになります。

私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

(詩篇 32・3～5)

ダビデのように告白する人は幸いです。

まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。ああ、私は答ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごりました。ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。

(詩篇 51・3〜6)

私たちは信者として、「私が罪を隠さずに告白するならば、主は決して私をお見捨てにならない」という確信を持っています。放蕩息子が帰ってきたとき父親が受け入れたように、主なる神もまた、私を受け入れてくださるという確信です。

もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ 1・8、9)

私たちはありのままの状態で主のみもとに行き、心の奥底を主に申し上げることが許されています。

主は私たちをご存知であり、すべてのことをご存知です。しかし、主は私たちが自分の罪を認識し、私たちの罪の負いめを告白することを望んでおられます。「私たちは、主ご自身に対して

罪を犯しました。私たちは主なる神の聖なるみこころに対して罪を犯しました。私たちは主に、自分の意志また支配権を渡そうともしませんでした。私たちは私たちの罪によって、主なる神の愛を深く傷つけました。」と。

主は、私たちの罪のために、十字架にかかれた主イエス様を見上げなさいと言われます。聖なる神は、すべての人を罪人として永遠の死に判定し、神の聖なるご臨在から追放し、地獄の暗黒に追いやられるべきとされながらも、この恐ろしい判決を、十字架上のイエス様のうえに下されたのです。私たちの身代わりとしての犠牲として。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ 53・5）

十戒を通して、私たちは、イエス様が担ってくださった重荷がどれほど恐ろしいものであったかがわかります。また、主イエス様が担ってくださった私たちの債務がどれほど大きなものであるかもわかります。十戒を通して明らかにした罪、また主なる神の御前に告白されたすべての罪は、神の小羊なるイエス・キリストのうえに置かれたのです。

その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

（ヨハネ 1・29）

私たちは、世の罪という重荷がどれほど重いものであったかを理解することはとうていできないでしょう。そしてまた、父なる神が主イエス様のうえに置かれた人類の不義と罪の下で、イエス様がどれほど苦しみ、悩まれたかも、私たちは決して理解できません。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。
(2コリント 5・21)

このみことばの中に測り知れないほどの深い苦しみが言い表わされています。主イエス様は父なる神のみところを完全に行なってください、その苦い杯を最後まで飲みほしてくださいました。そして主イエス様は罪人のうえに置かれた父なる神の呪いをご自身のうえに受けてくださいました。主イエス様はご自身の尊い血潮を流してください、ご自身のいのちを捧げてくださいました。ですから、救いの道が開かれたのです。

モーセの律法によっては解放されることのできなかつたすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです。
(使徒 13・39)

私たちの罪の認識は、私たちを救ってはくれません。むしろ私たちの恐ろしい債務を知ることによって、絶望的な状態に置かれてしまいます。罪の自己欺瞞から目覚め、自分が行なった罪のすべてがわかってしまった人は、絶望してしまい、生きることの希望さえ失うような悲惨な状態に陥ってしまいます。この世の罪は、あるいは裁判官の裁きを逃れることができるでしょう。し

かし、主の目から見ての人間の罪は、絶対の裁判官である神からは絶対に逃れることはできません。

そしてまた、単なる罪の告白だけでは罪の重荷から解放されません。告白によつては、すでに犯した罪が犯さなかったことにはなりません。

そしてまた、告白することによつては、誰も自分の心の考えを洗い流すこともできません。単なる告白は、罪を思い出させ、神と人間の前で自分を責めることを強めるだけです。

大切なことは、ただ、主イエス様だけが、ご自身の尊い血潮によつて私たちの罪を解放することがおできになるといふことです。なぜなら、イエス様が私たちの罪の身代わりに血を流してくださったからです。主の流された血潮は、私たちの罪をあがなうために、イエス様がご自身のいのちを捧げてくださったことの証明です。ですからイエス様は債務証書を無効にされたのです。

いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。

(コロサイ 2・14)

これこそが、イエス・キリストによる救いの、圧倒的なすばらしい福音です。つまり主イエス様は、私たちが主に告白したすべての罪を赦してくださいただでなく、消し去り、罪の債務から解放してくださったのです。

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去

った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。」

(イザヤ 44・22)

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ 1・18)

主イエス様の血潮は、私たちの罪を完全に、徹底的に消し去ってくださいましたので、神の目はもはや私たちの罪を見ず、その罪を思い出すこともなさいません。

「わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

(エレミヤ 31・34)

人間にとつてもつともすばらしい経験は、主なる神の御前にひざまづき、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。(ルカ 18・13)」と告白し、そして主が流された血潮のゆえに、「子よ。しっかりとしなさい。あなたの罪は赦された。(マタイ 9・2)」という主のみ声を聞くことです。それを経験した人の生涯は、主の恵みを誉めたたえる生涯となります。その人は主を誉めたたえざるをえないのです。

私は切なる思いで主を待ち望んだ。主は、私のほうに身を傾け、私の叫びをお聞きになり、私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げてくださった。そして私の足を巖の上に置

き、私の歩みを確かにされた。主は、私の口に、新しい歌、われらの神への賛美を授けられた。多くの者は見、そして恐れ、主に信頼しよう。
(詩篇 40・1-3)

罪の力の恐ろしさを経験した人、また十字架におけるイエス様の苦しみを見た人は、もはや罪を愛することができず、心の底から罪を憎みます。イエス様の愛が深く私たちを捕らえれば捕らえるほど、また、私たちがイエス様をさらにいつそう愛すれば愛するほど、罪は私たちにいつて、いつそう憎むべきものになります。私たちはもはや罪に仕えることができませし、仕えたいとも思いません。ただ、主を喜ばせたいと思うだけです。

主は私たちに「あなたはわたしを愛しますか。(ヨハネ 21・16)」とお聞きになります。私たちはペテロと同じように、「私があなたを愛することは、あなたがご存じです。(ヨハネ 21・16)」と心から言うことができます。私たちには、聖霊の力に頼って勝利が与えられます。私たちがもはや、欲望に支配されず、唇が清く守られ、不正を行なうことから守られます。

私たちは昼も夜も、「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。(マタイ 6・10)」と祈るようになります。これこそが私たちのうちに住む、聖霊の願いです。聖霊は、イエス様が始められたみわざを、主の再臨の日までに完成してくださいませ。

永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行な

い、あなたがたがみこころを行なうことができるために、すべての良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。どうか、キリストに栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

(ヘブル 13・20、21)

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

1 みことばの大切さ

真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。

(ヨハネ 17・17)

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとつて楽しみとなり、心の喜びとなりました。万軍の神、主よ。私にはあなたの名がつけられています。

(エレミヤ 15・16)

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持つていることを、あなたがたによくわからせるためです。

(1ヨハネ 5・13)

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことはによるのです。

(1ペテロ 1・23)

あなたのみことは、私の足のともしび、私の道の光です。

(詩篇 119・105)

みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至ります。

(詩篇 119・160)

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことを喜びます。

(詩篇 119・162)

2 悔い改めと信仰

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦

し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(1ヨハネ 1・9)

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

(箴言 28・13)

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

(詩篇 32・1～5)

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。

(イザヤ 55・6、7)

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

(ヨハネ 6・37)

3 私たちの身代わりとなられたイエス

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

(イザヤ 53・4〜6)

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

(1ペテロ 2・24)

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。

(2コリント 5・21)

4 血潮の価値

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」

(イザヤ 1・18)

ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもつて見のがして来られたからです。(ローマ 3・24、25)

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(1ヨハネ 1・7)

私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。
(エペソ 1・7)

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によつたのです。
(1ペテロ 1・18、19)

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。
(黙示 12・11)

5 確信の根拠

だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造つた方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖つたのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」
(イザヤ 43・1)

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。
(イザヤ 43・25)

わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。

(イザヤ 44・22)

そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。

(ルカ 7・48)

なぜなら、わたしは彼らの不義にあわれみをかけ、もはや、彼らの罪を思い出さなからである。

(ヘブル 8・12)

わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。(ヘブル 10・17)

東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。

(詩篇 103・12)

金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」

そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れませんが、私に対して何ができません。」

(ヘブル 13・5、6)

6 思いわずらうな

また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。
(マタイ 13・22)

だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりもっとすぐれたものではありませんか。

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださいならぬわけがありませんか。信仰の薄い人たち。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。

こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。

(マタイ 6・25～32)

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。

(ピリピ 4・6、7)

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

堅く信仰に立つて、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。

(1ペテロ 5・7、9)

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してください。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。

(詩篇 55・22)

7 試練の時

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。

(ヤコブ 1・12)

ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。

(ヤコブ 4・7、8)

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさい

ません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。
(1コリント 10・13)

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあつてその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全に、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。
(1ペテロ 5・8～10)

あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいきます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、

信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

(1ペテロ 1・5～7)

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。
(2コリント 12・9、10)

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。
(ローマ 5・3～5)

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益ととしてくださることを、私たちは知っています。
(ローマ 8・28)

疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができ。走ってもたゆまず、歩いて疲れない。
(イザヤ 40・29～31)